

ウォルフガンク・シャーデヴァルト デルポイの神と人間性の理念 (1965年)

—ギリシャ宗教史とヒューマニズム W. シャーデヴァルトの作品と業績—

掛 川 富 康

Per i miei amici di Roma,
Lubka, Canio, Angela

- I. 講演「デルポイの神と人間性の理念」(1965年)の訳出
- II. W. シャーデヴァルトの業績について
- III. W. シャーデヴァルトのビブリオグラフィー
—論文集『ヘラスとヘスペリア』第二巻 巻末による—

I.

Wolfgang Schadewaldt Der Gott von Delphi und die Humanitätsidee (1965)

ウォルフガンク・シャーデヴァルト

デルポイの神と人間性の理念 (1965 年)

I.

私たちは、歴史的・神話的な観点から「ギリシャ人」とか「古典古代」と呼んだり、さらに記念すべき芸術作品や、ギリシャ的・古典古代の文芸と思索の著作物を今なおいつでも手中にできる。このようなギリシャ人は、正しく見るならば、かつて存在していたというものではない。ましてや過ぎ去ったものにすぎないのではまったくない。ギリシャ人は、私たちの固有な文化的現在を本質的に構成する要素なのである。ギリシャ的なものは、ヨーロッパ的・西洋的な文明の本質的な構成要素である。このギリシャ的なものは、ローマ的なものやキリスト教と（同様に）並んで、精神的・決定的な素地なのである。ギリシャ的なものは、上記の構成要素のうちに原型的に、根底に横たわるものとして形成されたもののすべてによって、またそのように考えられたもののすべてによって、ローマ精神とキリスト教と並ぶ、精神的に決定的な素地を形成している。わたしたちも、この素地の

中に、意識するにせよ意識しないにせよ、今なお生きているのである。この素地は、時代が進行するにつれて内容ゆたかな多くの特徴とともに喪失されてしまったかもしれない。

(文明を)導く主要な糸のなかで古典古代のうちに「引き起こされた」システムは今日にまでいきわたっている。このようなギリシャ的・古典古代の構成要素に関わりを持つことはただ高度な精神的刺激であるだけでなく、多くの意味のあるものや美しいものにいたる道といえよう。このような仕事は、問題に近づくさいの困難さに出会だけでも、人を一生支配してしまうものであるが、それは、私たちの文化的な自己理解に貢献するものである。

このような仕事は、具体的・精神的な基礎分析という意味で、ひとつの時代と世界のなかにいる私たちの文化的自己吟味に役立つものである。この時代と世界の中では、文字どおり私たち自身の偉大な文化的成果のなかには、身体的・精神的に大いなる危険も迫ってきている。なかでも私はとりわけ科学技術のことを考えているのだが。ギリシャ人は、今日私たちにとって、私たちにはっきりと明らかになっているある新しい意味で、ヨハネス・ロイヒリンのような人も含め、偉大なギリシャ研究家や人文主義者にとってそうであったものになっている。つまり英雄なるものに。それは、異教の模範に、ということではなく、言葉の正しい根源的な意味で言うならば、古い信仰にしたがった、文字どおり危険の迫るときにこそ自らの墓から立ち上がる精神的助け手と言われるものに、不幸からの守り神に、である。

I

人間が人間的であること (Menschlichkeit) についての理念、つまり人間性の理念 (Humanitätsidee) も、私たちの今日の生活においては、上に述べたような意味でギリシャが現実存在していることを意味している。そしてこの現実存在しているという事実は、その起源から出発して説明することを必要としている。

人間性に関する思想 (Humanitätsgedanke) は、ギリシャ人によると、まずはっきり理念として考えられたものだ。この思想は、また多様な仕方で自己を増殖し豊穡なものたらしめているのだが、数世紀をつうじて伸展し、その結果ほとんどすべての民族がこんにち再び多様なしかたで話題にするものとなっている。人間性なるものは、信仰、自由、人格という概念とともに、わたしたちの時代の三つの主要な危険に対抗する最も強力な対抗物の一つと見なされている。その三つの危険とは、まず、私たちの生活が徹底的に技術に支配されるようになったことである。この技術の支配は過去150年来大衆社会によって将来されてきたものであるが、ますます寄る辺なき場所に近づき、それじしん私たちの内面性のもっとも深い領域に進入してきている。第二に、この技術化によって大衆を必然的に支配する組織が、統制と行政の中で、狭隘化される結果となっていることである。

最後に、すべての種類の国家による統制経済と全体主義というものがある。そうはいっても、人間性の理念は、このようにさまざまな形をとった意義を持っているのであるが、この理念には、こんにち私たちのあいだでは、その固有の本質についてはっきりとした輪郭というものがあたえられていないのである。

人間性の理念は、はっきりしないもの、多くの謎に満ちたものを所持している。このこ

とは、「人間的である」（*menschlich*）という言葉からしてそうである。とりわけ、人間らしいもの（*humane*）と人間的な（*menschlich*）という概念は、くわしく考察してみると、分裂したもの、しかも対立するまでに分裂したものであることが明らかになる。

そこで、この>>*menschlich*<< >>*human*<<という言葉は、ロシア語も含めたヨーロッパの主要言語においてと同じくドイツ語においても、私たちのかんたんな言葉の使われ方から見てみると、まず、人間的に・虚弱であること、また人間的に・無理なく赦すことの出きることを表している。私たちは、「人間的なものに出会った」と言うとき、この表現でほとんどのばあい死のことを思いやるのである。「誤りは人間的なものだ」と言うとき、この表現で、人間は、根本において貧祖なやつ、つまり非常に倒れやすく、壊れやすいものだ、ということを考える。「人間的な」（*menschlich*）とは、その後、自分を自らそれほど真剣に過度に大切なものと受け取らないこと、どのような種類の不幸にも、仰々しく騒ぎ立てることなく、忍耐し、放置し、軽く受け取ること、しかもそのうえ快活にそれに耐える特徴ある性格を指し示すことになる。このように悪魔それ自身と話すことは、それどころか偉大な人物と話すのに等しいことでさえある。

そして、「人間的な」とは、他の意味——それはある種の一般的な虚弱さと結びついているのであるが——善良な自由な寛容を意味している。すべて「人間らしい」弱さや虚弱さを理解しているということ、またこれらを理解しながら許しをあたえること、親切で自由な、好意的な、のびのびとした本質的特性のことを意味している。「悪魔自身とそんなに人間的に話しをするとは、或る偉大なる人物と話をするとおなじく、なんとすばらしいことか」。しかしながら放念とか寛容の意味での人間らしさの、このような一般的な意味と並んで、私たちは「人間」と「人間性」（*Menschlichkeit*）という言葉で、第二の意味で、つまり最高次の規律をもった、目的概念および模範として知っている。このようなところから私たちは、人間の尊厳は侵害されてはならないとか、人権は不可欠なものだと語るのであるが、この意味は、人間は動物と違ってただ存在するだけでなく、人間として課題が与えられているということであり、人間は自分自身で自分の人間であること、自らの尊厳、その自由、自分に本性的に与えられているが、つねに繰り返して満たされるべき全体、自らの最高次の全体的な自己実現、自らの幸福にみずから責任をもっている、ということなのである。人間の、また人間性の、このような排他的な、高次の、目標に結び付いた概念は、古代とギリシャ人にまでさかのぼる。古い時代の詩人たちの或る先行期を経て、この概念はまずプラトンとアリストテレスの哲学の中で明瞭に表現された。とりわけアリストテレスは、そのよく知られたニコマコス倫理学（第10巻、1177b31）のなかで次のような理解を示している。人間は自らの思考を、ただ人間的に過ぎない者や死すべきものではなく、不可死なものへの可能性へ向けている、という。というのも、人間は、理性、精神のなかに、神的なもの、不可死のものを所持しており、この神的なもの、不可死のものは、及ぶ範囲においてはわずかなものに過ぎないが、力と尊厳においてはすべてを凌駕し、私たちの最も固有な、真の自己として、人間に最高次の自己実現を保証するものである。この最も固有な真の自己の中で人間は「最も人間的」であることができるのである。アリストテレスによれば、この不可死なものは、その後、紀元前二世紀の中期ストア派の首領、

哲学者パナイティオス、キケロが訳したその著作『人間への要求』の中で、人間の尊厳、優位、特殊な位置を人間の本性から展開し、人間には四つの源泉から力が流れ込んでおり、その結果、実践的な行為において自らの存在を真に人間に値するものとして形づくる。パナイティオスは、この四つの源泉として、洞察力、(勇敢さを含む) 高潔、(自由な善行や正義において証明される) 社会的意義、最後に、節度や美しさに対する自然に即した感情をあげている。この感情こそ、その道徳的な性格に自己制限や自己規制を課するものとされている。この人物パナイティオスは、さらに、芸術や学問に専心することは、真に人間的なことに属することを見てとっていた。その理由として、芸術や知は、もともと人間に属していたことであり、人間の本質に固有なものである、ことをあげている。そしてパナイティオスは、プラトンと同じ伝説を伝えている。人が航海の途次、未知の岸にたどり着いたとき、耕された農地が目に入っても、何か心配事から逃れているとは感じとれなかったが、少したって砂地の上に幾何学的な図が描かれているのを見つけて、仲間に、これは安心できるぞ、と叫んだのである。というのも、彼は、人間の痕跡を見たからなのである。

この人間の高次の尊厳に関する思想は、キケロに仲介されて、その後ルネサンスとその後に、「人間の尊厳」>> *de dignitate hominis* <<に関する多くの著作を生みだした。そして、聖書、創世記 1,26の言葉、神は人間を自らの像に向けて創造し、人間に「海の魚、空の下の鳥、地を這うすべての動物を支配させた」は、人間が優れていることに新しいよりどころを提供した。その後、啓蒙主義をへて、啓蒙の生来の樂觀主義に立って宣言したのはヘルダーである。「われわれ人類のうちにある神的なものとは、人間性に対するその教養である。他方フンボルトは、その極度に個人主義的な教養理念の意味において、個人性から普遍性を経て全体性にいたる人間の道程のうちに、人間の自己実現を感知していた」。これらのことはすべて偉大なものとして感知され、そしてまた良きものとして考えられたのである。このようにして新しい個人主義に刻印された19世紀において、ソフィストの言葉にならって、人間を万物の尺度とする道のりが開かれたのである。この道程は、自らのアウトアルキー（自己充足）をただたんに従属させられた依存の状態から自由にされた存在として理解するばかりでなく、この自らのアウトアルキーを人間の自律へ、ついにはあの超人の構想へと高める。じつは、この超人の構想から非人間へに至るにはただの一步なのである。

事情はこのようであるから、私の研究は、自分でも驚いたことであるが、あの他の、人が言うところの、人間的なもの（das Menschliche）を「ただ人間らしい」ものとする、人間的なるものについての「たんなる通俗的な」概念は、それでも、われわれの人間観の本来的で・根本的な基礎であり、またそうあらねばならない、という結論に導かれたのである。この基礎が、たとえ、その後、人間のもっとも高次の尊厳に至るまでのピラミッドは、この基礎を超えて、精神的なもの、もっとも精神的なものにおいて頂点に達するにしても、である。このようにして、もっとも包括的な、もっとも根本的な、いわゆる人間的なるものについての我々の見方はついには宗教的な性質も含めて、デルポイの神、アポロンの旧い形姿についての見方、またこの形姿から展開した宗教の中に存在しており、またそこに根付いているのである。このことについて今からさらに論じてみよう。

II

人間は自己のうちに自らの精神、自らの理性を通して神的なものの一部を所持しているのであるが、この人間の高次の尊厳の思想とおなじく、あのもう一つの人間に関する思想も、それは、>> 人間的な << (menschlich) という言葉が単純に用いられている点で、今日どこでも支配している「人間的である」ことについての見方なのであるが、人間的であるということ、静寂な放念、理解し容赦するものとしてとらえている。人間に関するこのような思想も、啓蒙主義とルネサンスを超えて、キケロとスキピオの圏域を超えて、紀元前4世紀の後半期のギリシャ人にまでさかのぼる。人間らしいもの (das Humane) の理念 (>> *anthropinon* <<) が本来的に刻印された場所は、他ならぬ紀元前4世紀後半期のギリシャなのである。

マケドニアの支配下にあった都市アテネは、自らのかつての誇るべき自由をすでに失っていた時代である。それは、(アレクサンドロス大王の) 後継者の混乱のなかで神々への信仰が色あせたものとなり、その信頼が異教へと変質していた時代である。新しい神テューケー、幸福や偶然の神が、世界を支配する偉大な力へと高められていた時代である。そして人は善や悪に向かうこの力の支配にさらされていると感知していた。人間に関わる事物の寄る辺なさの意識とともに、その幸福のもろさは、最良の人びとを満足させたメランコリックな確信になった。「人間であること。これは救いのなさに苦しむに十分な理由だ」。このように語ったのは、その芝居が有する新しい人間像ゆえに、正当にも「人間性の父」と名付けられた喜劇詩人メナンドロスだった。当時このメランコリーは神を喪失した時代にあってサルトルのような人物の文体によって描かれた実存主義的なニヒリズムに、では全くなく、むしろ人間的であることに、つまり、隠れ家としての人間性に行き着く。このことは、例えば、次のように描写することができよう。

人間が経験し、そして苦しむその寄る辺なさは、克服することができる。それは、この寄る辺なさを自分の意志の中にすべて取り入れ、感情、行為のすべてにおいて人間的な寄る辺なさに従って振る舞うことによってである。「お前は人間だ。このことをいつも知り気に留めよ」(断片944)——「人は人間として人間的であるものを意識のうちに取り入れていなければならない」(Monostica I)。「友よ、ひとは運命の襲来を人間らしく受け取らねばならないのだ」(断片650)。このようにして、この「人間的・寄る辺ない」ということの「人間的な」ということへの移行がまったく明瞭になる。この移行は、「この寄る辺なさに従って」且つまた「人間的に」ということと、また、平然として、従順に、人間仲間に関しては、忍耐深く、ということと同じことになるのだ。

当時その他の点で寄る辺なき人間は、この人間が、自分に外から関わってくる事物すべてを、人間としていちどそこに身をさらされたものすべてとして理解し、放置し、そしてその結果「人間的に」それに耐えるかぎり、究極の落ち着いた場所を「人間的なもの」のうちに見出すのである。そして、他面において、人が自分の隣人と出会うさいに経験する、人間的な弱さや誤った行為を、このような人間的な寄る辺なさがもつ拘束力ある普遍的な連帯性の意識の立場から理解し、許しを与え、そしてその結果再びこの人間的な弱さや行

為を「人間的に」許容するのである。このメナンドロスの二つの文章,「お前は人間だ。このことをつねに知り、心に留めよ」「人は人間として人間的なものに心を留めねばならない」は、このようなギリシャ的な人間性の本質的なものを言い換えたものである。このギリシャの人間性の本質は、それが人間的な寄る辺なさを、十全な意識を以て、すべての感情、思考、行為の構成要素に仕立て上げる、点にある。このギリシャの人間性は、あの「人間に相応しくあること」、「人間らしくあること」に到達する。この「人間らしくあること」は、自分自身の不幸を忍耐する中で、放念すること、快活であることの中に存在する。それはちょうど、他人の誤りや間違った行為を、理解しつつ、そしてまたこれに許しを与える寛大さの中にあるように。人間的な人間は、理解しながら忍耐すること、静かな従順さのうちにあの「人間の基準に沿っているもの」を現実化している。そのとき同時に自分に与えられた霊の賜物(カリスマ)「人間は人間である時、人間はなんと愛すべきものか」―のすべてを充足させているのである。

III

旧き信仰がすでに色あせたものとなっていた時代、紀元前4世紀のアテナイで、あの「人間らしい」(humanitär)の意味においてこのような人間性の理念(die Humanitätsidee)が本来的にはっきりと示され完成されたとき、このこと(上記のこと)はただ概念の形で理解されたに過ぎない。というのも、じじつ「生きられた」人間的であること(die Menschlichkeit)の「形式」は、この地上人間のいるところでは、いつもそしてどこにおいても段階の差を以て見出されるからである。このように、人間的であることそのことの意識的に把握されたイデーは、それ自体においては何ら人間的な原思想などではない。というのも、注目すべきことだが、人間は、それ自体としては、自ら自分を人間として考慮するようなことはわずかにしかすぎず、あるいは考慮するきっかけをまったく持たないからである。生活が、単純にもっと家父長的であるとか、人間がより力強い信仰によって取り巻かれて生きている時代や社会形態のなかでは、人間は祖先の規則とか模範にしたがい、慣習とかならわしに従って行動し、神の戒律を遵守する。そして、これらすべてのうちに、いまだ十分に考慮されず、またはっきりと言い表されていないが、完全に十全である人間像を所持しているのである。旧来の秩序がゆらぎ、その結果、慣習、祭儀、宗教それぞれの力が衰弱するとき、はじめて、「人間の要求」が高められ、それが「人間の理念」(>>Idee des Menschen<<)という形をとって、ある種のあたらしいきわめて普遍主義的な宗教として、生活にあたらしいより所と方向を与える。4世紀のアテナイにおいて事情はそのようだったのである。この新しい人間性の理念(die Humanitätsidee)の起源とその真の根は、ふたたび、より強力で、より生気に満ちた旧来の宗教の領域に行き着くのであるが、この事実は、このあたらしい人間性の力にとって少なくない意義を有している。

この事実を跡づけようとする、われわれは、デルポイの神アポロンの宗教に引き戻される。それは、この宗教が神の形姿で経験され、そしてその宗教がデルポイの祭司という最高度に敬虔で、最高度に強力な精神的力を持った男たちによってはっきり表現された教

理へと、わたしは「神学」という表現を恥じるものではないが、この「神学」へと仕立て上げられたようにである。この神学は、力強い教育力をもって、ギリシャ人の生全体に光を投げかけている。ギリシャ民族についての教育家として、ウルリヒ v. ヴィラーモーヴィッツは、デルポイの神は、その宗教によって人間に、いかに行動し生きねばならないか、手本を示した、という評価を下した。いまや、このデルポイの神のこの教育する力の核心部分は、わたしがここで付言することが許されるならば、人間的であることへ向けられた包括的な教育なのである。とはいえ、この古いデルポイの神学における人間的なものは、人間に由来するもの (Anthropinon) という意味での「人間的なもの」 (das Menschliche) という概念では認識されたり理解されたりはしない。後代になって言われるように、人間的なものはデルポイのアポロンの戒律のうちに形をとったのであるが、より素直にまたより厳密に言うならば、まず、可死的なものの形式—その可死性における可死的なものという形式の下で、であるのである。

アポロンとは、ギリシャの神々すべての中では、その父ゼウスの壮大な崇高さに次いで、神的なものが有する最高次の神性を具現しているものだ。アポロンのいわば燃え立つような出現は、最高の位置にある英雄によって、精神の高み、近寄りがたさ、決然とした究極の姿勢によって、またとりわけ神の怒りのうちに啓示されるいわば澄み切ったような自負心、というものによって決定的に刻印されている。このようにホメロスはアポロンをその恐怖すべき姿のうちに見ている。たとえば、彼が腹を立てて、夜にも等しく、オリンポスの頂から降りてきて、その簋に収められた矢でからからとひびきをたてるとか、あるいは、彼アポロンが、押し合圧し合いするトロイアの軍勢の先頭に立ってギリシャ軍の囲壁を押し倒す時とか、子供が海岸で作りあげた盛り砂をくずしてしまう時とか。(イリアス 15, 360 ff.)。アテナイとかヘルメスといった他の神々であれば、オデュッセウスとかヘラクレスとかペルセウスとかのようなこの神々の寵児に対する助け手かその同伴者として仲間に加わることであろう。アポロンであれば、自分に親しい何人かの人間を危急から救い出し、自らこの人間に奉仕することも考えられる。しかしながらアポロンはじっさいは人間の仲間になることは決してなく、また友人になることも決してない。むしろ、アポロンはあえて尊大な態度をとる者にたいして、威嚇しつつ立ち向かってくる。パトロクロスに対する場合も事情は変わらない。彼は、イリアスの第16巻 (788) でアキレウスの忠告を無視して全トロイアを征服しようとする。ホメロスの言うように、>>Deinos<<「恐ろしい」アポロンはパトロクロスの背後に現れ、彼に手を下して背中を打つ。その結果、彼の兜は頭から落下し、その甲冑はバラバラになり、そして彼は硬直したように立ち止まる。同著イリアスの第22歌 (8) のアキレウスに対しても、第5巻 (440) に登場するディオメデスに対しても、事情は同じである。そして、このような状況でアポロンが放つ言葉は、いわばわたしたちの主題の上では、神性と可死性との間の隔たりを強調しているのである。

「ペレウスの息子よ、君はその早足でわたしに何を責め立てるのか。君は死すべきものであり、わたしは不可死の神なのだ」。「テュデウスの息子よ、君はこころするがよい。神々と同じ思いを持とうと思ってはならない。地を徘徊する人間の輩は不可死の神々とは決して等しいものではないのだから。」このような神がここで求めているこうした「思い」

は神的なものの、人間的なものとの距離にかかわる。そしてこの距離を強調することはこの神の本質に属することであり、そしてその結果、この神の神学に属する。この神は、イリアスの神々の戦い（第21巻、462）のよく知られた箇所、死すべきもののためにポセイドンと争うことを、神の自負心を以て拒んだのである。「この死すべきもの、あの惨めなものたちよ、お前らは、春の季節の木の葉のようにきらきらと光を放ちながら芽をだすが、しかしふたたび衰弱し過ぎ去っていくのだ」。このイリアスの箇所では、神性のもっとも高次の「自己意識」から距離が設定されて、ほとんど蔑むかのように人間の可死性の過ぎ行く姿が強調されている。

ここで私たちは、ホメロスが、概してギリシャ人がそうであるように、人間をあまねく死すべきものとして性格づけているじじつに思いを向けるのがよいであろう。ギリシャ語では、この死すべきものを表すのに二つの概念を *thnetos* と *brotos* という言葉までもが自由に用いられている。しかしながら、デルポイの神アポロンは、その形姿からしてすでに、このようにアポロンにだけ固有で過酷な、神性の高みから、死すべきものとしての人間を繰り返し自己自身に引き返すように忠告している。人間をその可死性へと叱責しているのである。

しかしながら、このことを語っているのは、この神の形姿だけではなく、あの「デルポイの格言」(>> *delphika parangelmata* <<) もこのことを語っている。この格言は、デルポイの神殿の碑文とされているものもあれば、一いわゆる七賢人の格言のように一、デルポイに関連付けられているものもある。とりわけあの「汝自身を知れ」(*gnothi seauton*)、つまり、人間よ、自らを、汝の可死性のうちに (*thneton onta*)、死すべきものとして認識せよ、がそうである。

さらにあの「過度にならないこと」(*meden agan*)、あの「与えられたものへの視線」(*kairon hora*)、あの「中庸が最良のものだ」(*metron ariston*)、あの「慎ましくあれ」(*sophronei*)。最後に、すでに「汝自身を知れ」の中に含まれている事柄を最も明瞭に言い表しているのは、あの *thneta phronein*（これは、まず、デルポイの知恵を明瞭に総括した概念としてソフォクレスが証言しているものだが）、「心して死すべきものを思え」(断片590)あるいは「汝が死すべきものであるという意識を、汝の思考、感情、行為すべての規範たらしめよ」である。一ただちに、人は、このデルポイの「心して死すべきものを思え」は、あのメナンドロスの「人間的なものを思え」を先取したものだと気がつくだろう。とりわけメナンドロスは、おそらく「死すべきものを思え」をも知っていたと思われる(断片945)。「人間的なもの」(*das Menschliche*)という概念の根本的な意味は、その起源をデルポイの神の宗教のうちに持ち、この宗教から見て「死すべきもの」として示される。死すべきものは、不可死の神を前にしてそれがへだたりをもつこと、限界づけられていること、このような死すべきもの、これが「人間的なもの」なのだ。

デルポイの神アポロン、最高度に神らしい神は、人間を次のように叱責する。つまり、この神は、人間をその可死性という限界へ投げ返す。そして、人間がこの可死性に気がつき、自らの感情、思考、志向においてこのような可死性の限界を測りにして「振る舞う」よう求める。この振る舞いは、そのようなときにこそ、「人間的な」振る舞いなのである。わたしたちは、「可死性に相応しく」から、「人間らしさにふさわしく」「人間的な」へと

さらに続く意味連関を若干のデルポイの伝説を素材にして学ぶことができよう。この伝説は、後代になってようやく伝承されたものののだが、たしかに旧い時代に起源する。この伝説の中では、テッサリア出身の或る男が、角が黄金でできている百頭の牛をこの神に捧げている。ピュティアはこの男に言う。ヘルモニア出身の或る男のほうがこの神にとってはより好ましいであろう、と。この男は、三本の指を用いて自分の袋の中から少しの穀粉をこの神に捧げたのである。ヘルミオーネからの男がこのことを聞いたとき、だめ押しをかけたいと思って、袋の中の穀粉をすべて神の祭壇にふりかけた。—これに対してピュティアは彼をたしなめた。「ヘルミオーネの男は、この神に二重に嫌われたのだ。どのように、彼はいぜんこの神に気に入られていたのだろうか」。この話が根本において言わんとしているのは、いかなる種類の人間的なデモンストレーションも敬虔のうちに住むこの神自身に逆らうことだ、ということである。—あるいは次のようなことである。この神に素晴らしい多数の牡牛を犠牲にして奉げた或る男が、期待にあふれた問いを立てた。誰がこの神にもっともよく、またもっとも熱心に、敬意を表明したのだろうか。「メテュドリオンからのクレアルコスだ」というのがその人を驚かすような答えであった。そしてひとがこのクレアルコスを探し出すと、そこに居たのは、静寂な規則性を以て、いつも決まった時間に、神々の像で自分の家を飾り付け、決まった時間に、これらの像に奉げものの菓子と香料を持ち運んでいた、一人のまったく即物的な人物であった。このようなほとんど無意識的に限界のうちに振る舞うという静かな慎ましが神にとり、「人間的なもの」と映ったのであり、この人間的なものが神に喜ばれたのである。このような証言を閉じるにあたって、もう一度ホメロスのことに触れたい。ホメロスはイリアスの第24巻(32以下.)でアポロンがアキレウスに怒るような嘆きを吐露させているのだが、この怒りのデルポイ的な根本性格を、まずフランク・ディールマイヤーが1939年の或る重要な論文のなかで指摘している。後代のほとんどすべての「人間的性格」はホメロスが描写したデルポイの神の自己証言のうちにいわば「地下に埋もれたかのように」見取り図が与えられているという。—アポロンは、神々の集まる中で、アキレウスに嘆きの声を上げている。アキレウスは、ヘクトールの死後も、友の死を巡って心に痛みを感じつつも、泰然としていようともしない、と。アキレウスは、ただ野蛮なもののみを知る獅子なのである。それは、人間性とは対照的な動物的性格(Animalität)である。アキレウスは、恥じらい(aidos)を喪失したかのように、心を動かす(eleos)能力を持っている。自らの可死性に気づいている人間は、ともに苦しむことをも、恥じらいなるものを知っているように、知っているだろう。—彼の感覚は、人間の「持ち分」(aisa)が何であるかを考慮に入れない。彼は硬直しており、妥協というものを知らない。自分の「持ち分」—それは「死すべき持ち分」であるが—を考慮すること、自ら「謙ること」、このようなことが人間的なことなのだ。—アキレウスは、運命の女神がとにかくも人間に、忍耐して何かをやり抜き、従い、それを受け入れることができ、また受け入れるべきである感覚を与えたということを目に留めない。苦悩(>> tlemosyne <<)すること、放念しつつ忍耐する力こそは人間的なものだ。そしてそれゆえに、冷酷な人や極端な人は真の人間でも、なんら美しく—善良(>> kaloskagatos <<)な人間でも、まったくなく、地中に宿る巨大な原始的な暴力なのである。

IV

アポロン、それはデルポイの神なのだが、彼の有するあの高みと神的性格の点で、その本質において、とりわけ三つの根本的な特質によって規定されている。アポロンは、託宣の主人として、全知であり、また真理の神でもある。このようなものとして、アポロンは隠されたもの、明らかにされないもの、見せかけ、を嫌う。それゆえ、万物が、それ自身においてあるところのものとして、啓示され、存在に到達することを要求する。

それに加えて、アポロンは清めの儀式の主人として純粹性の神である。アポロンはそのようなものとしていかなる種類の不浄を嫌うものであり、事物と同じく人間も自己自身との最高次の同一性にもたらされることを要求する（というのも、これこそギリシャ的意味での純粹さだから）。次いで第三に、アポロンは豎琴の主人、ミューズの主人として音楽の神である。音楽の人を喜ばせる魔術は、それが感覚的に知覚可能になるや、内的な秩序だった状態から、韻律から流れ出す。そのようなものとしてアポロンは、野蛮なもの、混乱したもの、過度な熱狂、制御できないものを、嫌う。—このような神が人間を神的なものの持つへだたりから、その可死性へと投げ入れると、すでに私たちが語ったように、神は人間から、謙遜 (>> *tapeinotes* <<), 卑下を求めはしない。神は人間をその可死性へと投げ入れるが、それは、人間の存在が可死的なものだからである。そして神は人間をそのようにして初めて人間存在の真理の中に置く。そのようにして神は人間を最も真性な、自己との同一性へともたらす。そして人間に、天と地の偉大なる秩序のうちにある人間としての彼に属する場所を提示する（可死性は人間の「場所」である）。人間を人間的な条件 (*conditio humana*) の下で、人間を超えているもの、人間の回りにあるもの、人間がそれ自身であるところのもの、に対する正しい関係の中に置く。

デルポイの神が人間に要求した、可死性に気が付くことによって初めて人間に、普遍的形式、根本的な知、いわばメートル原器が付与される。このメートル原器により人間的なものの他のすべての基準が測定されるのである。そしてこのようにして、可死性という自己の限界と神的なるものから、固く保持されている隔たりのうちにあって、人間は最高度に人間であることができるのである。その可能性のうちにある自らに固有の尊厳を自由と人格性へ向けて現実化するべく、自分の十分な力を開放することができる。ついにはこのことが、規範に関するギリシャの倫理学の意義なのである。この倫理学は中庸の倫理学では決してない。ギリシャの規範の倫理学は、デルポイに出発点を持ったばかりでない。それは、デルポイの神学を通してはじめて、精細な確信に満ちた特質、およびヘラスの人間の全生活、詩作、思考に放射する力を獲得したのである。

V

ここで与えられた観点に立ってさらにギリシャの宗教史を評価すると、おそらく以下のような事実に導かれるだろう。それはすなわち、そのたびごとにそれなりの仕方の意味を持つギリシャの神の多数の形姿のなかでも、(ディオニュソスとオルフィスムスを除けば) ただ二つの形姿だけが有意義な神学を展開した、という事実である。人間と神々の父なる

ゼウスに関連する神学は——ホメロスによれば、それはとりわけヘシオドス、ソロン、アイスキュロスという宗教的思想家によって展開されたものののだが——ディケーの神学である。つまり、社会の体制を調停するものとして、これを保証し、そのことから国家の実態になったあの正義の神学である。プラトンがその後期の作品の中で、法律に関する対話を、ゼウスの誕生の地、クレタ島のゼウスの洞窟につづく道の途上で、展開させているが、このことも十分な根拠がなければあり得ないことである。デルポイの神学は、デルポイの神官が「神の子」アポロンの形姿から展開したものだが、この神学は、とりわけ国家や個人の生活様式、人間の生活様式である倫理に向けられたものである。この人間の倫理なるものは、人間が神的なるものとの間に持つ距離、可死性が不可死なるものとの間に持つ距離から発したものである。デルポイの神の神学のなかで語りかけられているのは人間自身なのである。そして、人間がそのもとに立っている条件であるところの自らの可死性へ向けて語りかけられることによって、人間は有限な可能性、しかしこの有限性の中で、自らが人間であることの充足した可能性へと指示される。

デルポイの神のこのような神学が、ギリシャ人の思想、詩作、形姿に及ぼした影響は、理解するに困難である。しかしこの理由からして、ギリシャ人の思索や詩作の歴史のなかで新たに評価する必要がある。わたしたちは、すでに、(この神話が)ホメロスに光を投げかけていることについて語った。といってもとりわけ5世紀に、このデルポイの神学の放射は、非常に大きな力、形成するのとまったく同じような活性化する力の性格を帯びたのである。以下に目にとまった数多くの例の中から、若干のものをあげてみよう。

デルポイに深く規定された詩人はピンダロスである。彼の視線は、とりわけ競技の偉大なる勝利を称賛することに注がれている。その視線は、驚きに満たされて、また興奮の域に達して、人間的であることの高み、偉大なる恩恵を付与された業績の高みの地で安らっている。

しかしながら文字どおり、この詩人が人間の業績のこのような頂点を称賛することによって、詩人はいつもそれと同時に人間の可死性、寄る辺なさ、過ぎ去る性格の地平に視線を向けている。このようにしてピンダロスの思考は、気分のあちらこちらのうちに動いている。そしてこのことが、栄光と暗闇が混合されることによって、彼の詩作品に独自の美しさを与えているのである。

第11ネメシス頌歌では次のように謡われている。

「しかし誰かが幸いに恵まれ、
姿形は人に優れ、
競技においても秀でた力を現しているなら、
その人は死すべき肢体を身に着けていることを、
そして全ての終わりに地をまとうであろうことを、
忘れてはならぬ」。

第8ピュティア頌歌では次のように謡われている。

「しかし新たな栄光を手にした者は、華やかな祝福を受け、

おのれの雄々しさを誇る翼に乗ってさらなる希望に天を翔け、
 富にまさる思いを心にめぐらす。
 つかの間に人の喜悦は生い育つ。
 しかし願いをくじく神の意志に揺すられれば、
 それはまたつかの間に地に堕ちる。はかない定めの人たちよ！
 人とは何か？人とは何でないのか？影の見る夢
 —それが人間なのだ。
 しかしゼウスが好機を授けてよこす時には、
 光芒が男たちの上に宿って甘美な生が訪れる。」

第3ピューティア頌歌では次のように謡われている。

「人はおのれの足元にあるものを見、
 どんな定めに我々が従っているか悟って、
 死すべき身の心得に相応うものを神々から求めねばならぬ。
 けっして、愛しい魂よ、不死の生を追及するな。
 むしろなし得る手だてを尽くすがよい。」

あるいは、第五イストミア祝歌では、はっきりと次のように謡われている。

人生の純粋な喜びを、咲きほこる幸の中で養うのはただ二つのことだけ。
 つまり、人が成果を得、頌辞を聞く時である。
 ゼウスになろうとは思ふな。これらの幸せに恵まれたら、あなたは、
 全てを手中にしたのだ。
 死すべき者には死すべき定めがふさわしい (Thnata thnatoisi prepei)。

三大悲劇作家の中でも、とりわけソフォクレスはあのデルポイの神学に浸透させられていた。コーラスの女性たちがエレクトラに与える警告は、デルポイ—アポロンのなものである。

エレクトラよ、汝は所詮死を免れぬ人間の身だったことをお考えなさい
 ね！ オレステスも同じこと。
 だからあまり悲しむことはおやめなさい。
 それはわたしたちがみんな受けねばならない運命なのですもの。

あるいはある断片 (590) では次のように言われている。

死すべきものは、死すべきことを思え。

そしてそのように、『トラキアの女たち』(473) のなかでディアネイラは美しい捕虜の

女と悲しみを共にしつつ、「死すべきものとして死のことを思いやっている」ひとりの女なのである。また狂気によって滅びたアイアスを見やりながら語るオデュッセウスの言葉もそうである。

彼は悲しんでいる。
貧しき人よ、彼も私の友人なのだ。
彼は、厳しい救いがたさに鎖でつながれているのだ。
自分自身の運命ばかりでなく、私自身の運命をも思いやりながら。
私は見たのだ、われわれは生きている限り、
夢を画く者、逃げ去る影そのもののものだ。

しかしながら、このような個々の描写を超えて、ソポクレスの悲劇作品は大いなる対立に包囲されている。それは、「すべての生き物の中で人間が最もひどいものだ」と「人間は無である」との間の対立である。

多くのものは恐ろしいものだ。しかし、人間ほどに恐ろしいものは何もない。(『アンティゴネー』332)

そして次のように言われている。

「おお！ 死すべきものの輩よ！
わたしは、いかにも、汝らは
汝の人生の中では無に等しいものに数える。…
(『オイディプス王』1186)

このようにじっさいのところまた「オイディプス」も幸福のはかなさについての悲劇となっていて、デルポイのひとつの偉大な「見よ、この人なり」(*Ecce homo*)として我々の前に立ちはだかっている。「歴史の父」、ヘロドトスは自分の訪ねたデルポイ — この土地に彼は詳細に通じていたのだが — に緊密に結び付けられたのだが、人間と人間の出来事に視線を向けている。そしてそのようにしてまたヘロドトスの歴史作品と歴史感覚は、一貫してある普遍的・一人間的なものを視野に入れている。この普遍的・一人間的なるものは人間の共通した壊れやすさと多様性の意識の上に立っている。それは何よりもまず、ソロンとクロイソスの物語の中ではっきりと表されている。人間、「純粋な偶然」、環境の純粋な産物(第1巻32)は、その幸福の壊れやすさを経験した際には、尊大な態度をとってはならない。クロイソスが火刑の際にソロンの名を叫んで、キュロスの問い、キュロスがソロンとの出会いについて物語っていることは何を意味すべきなのか。そこでは次のように言われている。「キュロスは通訳からこのこと〔クロイソスの語ったこと〕を聞くと気持ちが変わり、自分も同じ人間でありながら、かつては自分に劣らず富み栄えたもう一人の人間を、行きながら火あぶりにしていることを思い、さらにはその応報を畏れ、人の世の無情をつくづくと感じたので(壊れやすさの連帯)、燃えている火を出来るだけ早

く消し、クロイソスと彼の道連れの子供たちを降ろすように命じたという。…」その後クロイソスはキュロスに随行して生きた。とはいえ後になって、キュロスがマッサゲタイ人との戦いから身を引くべきかどうか、が問題となったとき、クロイソスはキュロスに次のような理由付けを持ってキュロスに反論する。「汝、キュロスよ、汝が御自身も御麾下の軍隊も、永劫に滅びぬものとお考えであるならば、私など意見を申し上げても何の甲斐もありますまい。しかしながら、王御自身もまた王が号令なされる者どもも、みな人間であることを弁えておいでならば申しますが、先ず人間の運命は車輪のようなもので、くるくると廻りつつ、同じ者が何時までも幸福であることを許さぬ者だと言うことをご承知なさいませ」。

ついに、デルポイの神がプラトシとプラトンの哲学するという知の姿勢へ及ぼした影響は強力なものだ。この哲学するという姿勢の一つの根そのものはよく知られたソクラテスの「無知の知」である。このような知の態度は、「思慮」(*Sophrosne*)という冷静に自己を慎むことによって担われているのだが、デルポイの神は、ソクラテスが裁判官たちを前にして陳述しているように、ソクラテスその人を「最高の賢者」であると宣言し、彼にその人間を吟味し、真理を探究することへの道のりを提示した。この「無知の知」は本質的にデルポイ的なものだ。神はここで、他の場合も人間一般をそう論じているように、人間の知識の本質をも人間的な近寄りがたさと制限があることへと投げ返している。そうはいっても、まさしく非知識として知られる知識として、人間の知識は今や再び真理のうちにあることができるし、存在を所持することができる。思いあがった知識は、人間の思いあがりすべてと同じく神に嫌われるのだが、何らの内的な真理をもつものではない。それは同時にして二つのもの、「暗闇」と「仮象」(*doxa*)なのである。—そして今やソクラテスは、その弁術(20d)の中で自分も「或る種の」学問を身に着けていると思ひ込む。彼は「神への奉仕」(*latreia tou theou*)としてこれを注視する。この「或る種の学問」はあの思い上がった、人間を超えたものではない。このような学問は、天にある、また地の下にある事物について消息を知ろうとする。この「或る種の学問」は、ソクラテスが手探りで—というのもそれはいまだ何らの名前も持っていないので—言っているように、「おそらく或る人間的な学問」(*anthropine sophia*)であろう。この学問においては、ソクラテスは、「人間的なことだが」、そのすぐ後で「人間に相応しい」(*kat'anthropon*)ものと解釈している。さていまや、この「人間に相応しい」学問は「哲学」そのもののものだ。哲学は、ソクラテスがたとえば「認識」したように、デルポイの「汝自身を知れ」という意味で、次のことに基礎づけられている。それは、「真理のうちに知りつつただ神のみが存在する」(23a)、そして人間は「真理のうちにある知識に関しては」何も役に立たない、ということである。したがって、哲学は、人間に相応しい「人間的な」学問として、なんら「知識の所有」などを意味せず、文字どおり「愛—知」(*philo-sophia*)なのであり、そしてまた「愛—知」となるのである。哲学は知るに値するものを人間に提供はしても、自分が原則的には無知であることを人間に知らしめることを決してやめない。プラトンにとっては、このような思想が、彼を広さ、深み、高みへと、そして包括的な全体へと導いていったのである。そのかぎり、このデルポイ的—ソクラテ斯的「人間的な」知識の姿勢

は、妥当性のあるものとしてつねに存続し続けているのである。プラトンは高齢になるにつれて、最高次に位置する事物について、つねにより慎重に、より控えめに、より熟慮しながらに語るようになる。かれは、広く知られるところとなった原理論について、自分の最も内密な同僚以外には、発言しなくなる。そして晩年の作品『法律』の中で、「人間が万物の尺度である」というソフィストの言葉に、自身の、根本においてはデルポイの確信、「万物の尺度は神である」(『法律』第4巻, 716c)をもって異議を唱えている。

VI

本質に相応しい弱さというものは、それが本質に相応しいものであるということのうちに認識されると、結果として力になる。このことは人生の経験のなかでさまざまな形で観察されるひとつの事実である。人間的であること (die Menschlichkeit) の場合においても事情はそうである。人間的であることは、この言葉が可死性、幸福のはかなさとして認識され、そして包括的な基準へと高められる時、その高次な力は、人間のもつ本質に相応しい非力から引き出されているのである。そのばあい、人間的であることが持つこのような力にとり、際立った特徴は、この人間的であることはふたたび要求というものをまったく持たない、ということである。そしてこのことは、人間的であることというもののすべての形式ににおいて認められる。人間的であることが暴力を有するかぎり、人間的であることは、あのメナンドロスの言葉が語っているように、優雅さの暴力である。「人間は、彼が人間であるかぎり、なんと愛すべきものであることか」。その言葉はこう語っている。

人間と人間的であることというあのもう一方の排他的な概念、それは目下の詳しい論述の冒頭で問題であったのだが、またあの早くもギリシャ的な概念になっていた人間の尊厳と優秀性、さらにとりわけヘルダー以来過度に強調された人間についての高次な見方—ヘルダーによれば、人間をその全体性、自由、人格性、最高次の自己充足のうちにある「人間」へと作り作りあげられるべきものであった。このような人間に関する頂点に位置する概念と目標となる概念はデルポイの神のあの要求のうちに位置づけられるのである。

まず第一に、人間の、高次へ向かっての努力のすべて、とりわけ人間の権力の獲得は、それがあのデルポイの神のあの戒律の条件のもとにたち、そして人間が死すべきであるということを真剣に受け取るという意識の内部で、人間的なものが神的なものとの間に持つへだたりを保持するとき、そのようなときのみ、有益なものと思われるのである。

このようにして、死すべき限界の中で自己自身を知る人間。そしてそこから行動し計画を立てる人間。このような人間こそは、そのようにして獲得された自分の存在の真理の中で、はじめて、自由、尊厳、人格性、教養、自分の力すべての最高次元での自己現実化を発見するように思われる。というのも、「人間の場所は、死すべきものであるという地平によって、決定的に包囲されているからである。」そのようにして、人間を再び神的なるものに近づけるのは、ただ、神的なるものから保持された隔たりのみなのである。

ただ静かさのうちに自分を純粹に保て、

そして、自分の回りに雷鳴をとどろかせよ。
 汝がひとりの人間であることをより多く感じとればとるほど、
 ますます、汝は神々に似たものであるのだ。

* ヘルダーがキケロやギリシャ人の人間性の理念を止揚したことについては、*Friedrich Klinger*, *Humanität und Humanitas*, Beiträge zur geistigen Überlieferung, Godesberg 1947; jetzt in: >>Römische Geisteswelt<< 4. Aufl. München 1961. この問題領域全体にとっての現在の研究状況にとり決定的なのは、*Wolfgang Schmid*, *Besprechung von Franz Beckmann*, >>Humanitas<<, in *Gnomon* Bd. 28., 1956, S. 589 ff. である。本論 9 頁に提示された、*Franz Dirlmeier* の論文は、*Archiv für Religionswissenschaft* Bd. 36, 1940 に公刊された。これについては、>>Aristoteles, *Nikomachische Ethik*<<, Berlin 1956, S. 245 ff.

デルポイの神については、*Ulrich v. Willamowitz-Moellendorf* >>Der Glaube der Hellenen<<, Bd. 2, 3. Aufl. Basel/Stuttgart 1959, S. 26 ff.; *Martin P. Nilsson* >>Griechische Glaube<<, Bern 1950, S. 50 ff., 57 ff.; *Ulrich v. Willermowitz-Moellendorf* >>Erkenne dich selbst<<, Reden und Vorträge II, 4. Aufl., Berlin 1926, S. 171 ff.; *Walter F. Otto* >>Die Götter Griechenlands<<, Frankfurt am Main 1947, S. 65 ff. われわれの文脈ではデロス島のアポロンの叙述も重用である。このアポロンは、左手に弓をたずさえ、右手には三人のカリスの女神を抱いていて、人間に「過ちのあとの心の変節」を求めている。*Rudolf Pfeiffer*, "The Image of the Delian Apollo and Apolline Ethics" 1952, jetzt in: *Ausgewählte Schriften*, München 1960, S. 55 ff. —

ソボクレスの人間性については、*Albin Lesky*, *Sophokles und das Humane*, Almanach der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Jg. 101, 1957, S. 222; jetzt in: >>Gottheit und Mensch in der Tragödie<< Drei Vorträge von *Hans Diller*, *Wolfgang Schadewaldt*, *Albin Lesky*, Darmstadt 1963, Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 27 頁に引用されたゲーテの格言は *Zahme Xenien* V Vers 1165 ff. を参照。さらに、*Ernst Grumach*, *Goethe und die Antike*. Eine Sammlung. II. Berlin 1949, S. 966 を参照。

* ここに邦語へ訳出した W. シャーデヴァルトの講演は、1963年11月6日、宗教改革時代のフマニストであり、またヘブライスト、カバリストでもある J. ロイヒリン (1455-1522) の生誕の地、オーバーシュヴァルトツヴァルトにある小邑プフォルツハイムで、同市が優れたフマニズム研究の業績に与えているロイヒリン賞を、1963年シャーデヴァルトが受賞したことを記念してなされたものである。南ドイツ、プフリンゲン市にある出版社ギュンター・ネスケの編集する "Opuscula aus Wissenschaft und Dichtung" の第23巻として1965年に出版された。その後、論文集『ヘラスとヘスペリア』第二版、第1巻、1970年、669ページ以下に収録された。訳出にあたって多くの忠言を与えてくれたテュービンゲン大学の R. ブライマイヤー氏に感謝申し上げる。

** Menschlichkeit と Humanität という言葉は、一般的には、日本語として「人間性」という同じ言葉になるので、出来るかぎり、*menschlich*, *Menschlichkeit* には、「人間的である」「人間的であること」の訳語を、他方、*humanitär*, *Humanität* には「人間らしい」「人間性にみちた」、「人間性」という訳語を与え、両者を区別した。

*** 文中の詩人ピンダロスの頌歌については、邦訳の文章として内田次信氏の訳文 (ピンダロス『祝勝歌集断片選』西洋古典叢書、2001年) を採用させていただいた。テキストにあるピンダロスのドイツ語訳文は、シャーデヴァルトの訳文とみられる。内田氏の上掲書の解説によれば、シャーデヴァルトは論文 "Der Aufbau des Pindarischen Epinikion", *Schriften der Königsberger Gelehrten Gesellschaft, Geisteswissenschaftliche Klassen* 5, Heft 3. Halle 1928 によって、ピンダロスの詩の背景にピンダロスの個人的傾向を見る従来の解釈をとらず、祝勝歌のジャンルの歴史からみて、「慣習のパターンの表現法」の伝統に即したものをしているとされる (この問題についてはさらに、下記の *Karl-Heinz Stanzel* の文献などが参照されう)。

***さらに文中におけるホメロスの叙事詩、ヘロドトスの「歴史」、ソポクレスの作品からのドイツ語の引用文は、シャーデヴァルト自身のものであるが、それぞれ下記の翻訳を基礎とし、あるいは参考にさせていただいた。『ホメロス』呉茂一・高津春繁訳、西洋古典文学全集1、1969年、『ヘロドトス』松平千秋訳、西洋古典文学全集10、1967年、『ギリシア悲劇全集』第2巻ソポクレス、人文書院、1960年。

II

近年におけるわが国の西洋古典学にみられる特徴の一つは、英米系の言語分析を中心とした研究に影響されるところが多く、ドイツ系の古典学の成果は、その深さと広がりにもかかわらず、十分に紹介・吸収されていないということであろう。近代におけるドイツ古典文献学 (Klassische Philologie) あるいは古代学 (Altertumswissenschaft) は、Fr. A. ヴォルフ (1759-1824) や F. シュライエルマッハー (1768-1834) の影響を受けた A. ベーク (1785-1867) によって方法論的に確立され、以後、U.W. メレンドルフ、W. イエーガー (1888-1961) らによって継受・進展された。シャーデヴァルトも、本稿で紹介されたように、メレンドルフとイエーガーの両人の伝統を意識的に受け継いでいると語っている。ドイツ古典文献学の特徴のひとつは、宗教学や宗教史との結びつきと存在論的関心にたいする旺盛な関心をもっていることである。ここに訳出したシャーデヴァルトの講演においても前者は顕在的に主題化されているし、後者もその視線を感知することが出来る。

19世紀末から20世紀前半期におけるギリシャ古典学の泰斗メレンドルフおよび W. イエーガーの下に学んだ W. シャーデヴァルトの業績は、ホメロス研究に端を発し、これを基軸としているが、ホメロス研究の他—オデュッセイアのドイツ語訳などがその筆頭にあげられるが—、ギリシャ哲学の始まり、ギリシャ抒情詩、ヘロドトスやツキュディデスの歴史学に関するもの、など多岐にわたっている。ギリシャ研究の視線も、その後の近代・現代における西洋文化の展開と切り離してはならないというシャーデヴァルト姿勢は、青少年の古典語教育への提言、大衆を相手にした劇の上演への参画などに具体化されている。

シャーデヴァルトの学問的業績は、上記のように、ホメロスの翻訳と研究、ギリシャ哲学、ギリシャ抒情詩、ギリシア悲劇、ヘロドトス、ツキュディデスの歴史研究に関するものが第一にあげられるが、これらにつづく、ゲーテ研究、青少年に対する古典語教育への提言、メディアを通じたギリシャ世界の大衆への啓蒙なども、いずれも古代ギリシャ世界の精神と文化が、恒常的に西洋の文化と精神に影響を与えているという観点からなされている。つまり、ここに訳出した論文の冒頭に記されているように、古代のギリシャ人が詩文、歴史叙述、哲学、抒情詩等において表出した現実理解は、2000年以上の長きにわたって、現代にいたるまでの西洋文化の本質を構成し、今後ともこの影響力を維持し続けるだろう、という確信の見解を提示したことにある。なかんづく、ホメロスの二つの叙事詩のドイツ語への訳出とは、このような彼の見解の出発点に位置する。

ここでさらに、そのホメロス研究とゲーテ研究の関係について一言を敍されるならば、ホメロスの現実理解とゲーテの現実理解には本質的な共通性があるという見解であろう。シャーデヴァルトによれば、ホメロスの二大叙事詩に表出された現実理解は、事物をそのエネルゲイアにおいて捕らえ描写することにある。いまだその可能態 (デュナミス) のうちにある姿においてではなく、事物がその本来の働きの可能性を十全に開花させた姿・状態、つまり現実体において表出するのがホメロスの叙事詩の本質的特質であり、このような現実把握は後代のゲーテの文学、例えばその『イタリア紀行』の随所に見られるであろう。

また本講演の冒頭にもあるように、とくに技術を意味する「テクネー」というギリシャ語の根源的意味を考察し、これに帰って、現代における科学技術が将来させた危機的側面に警告を発している点などは、現在のわたしたちに直接うったえるところがあると言えよう。いずれの問題も、1970年に70歳の誕生の年を記念して出版された2巻の論文集『ヘラスとヘスベリア』に収録された論文や講演において追求されている。

ホメロス研究は、Von Homers Welt und Werk. Aufsätze und Auslegungen zur Homerischen Frage, vierte verbesserte Auflage, Stuttgart 1965, として、またゲーテ研究は、Goethe Studien.

Natur und Altertum, Eduard Spranger zum Achzigsten Geburtstag am 27. Juni 1962 in Verehrung und Dankbarkeit dargebracht, Berlin 1990, Berlin 1942, Tübingen 1950, Zürich und Stuttgart 1963, として刊行されている。

1950年から活動しはじめたテュービンゲン大学での講義の記録は、1970年代末、ズールカンブ・タッシェンブーフ・ヴィッセンシャフト・シリーズ (stw) の中に6巻で計画され、2013年現在、以下の4巻が刊行されている。エウリピデスとギリシャ悲劇の関する第4巻とギリシャ精神のヨーロッパ文学への影響史を扱う第6巻が未刊である。

- * Die Anfänge der Philosophie bei den Griechen. Die Vorsokratiker und ihre Voraussetzungen, Tübinger Vorlesungen Band 1. Unter Mitwirkung von Maria Schadewaldt, herausgegeben von Ingeborg Schudoma, stw 218, 1. Aufl. 1978.
- * Die Anfänge der Geschichtsschreibung bei den Griechen. Herodot/Thukydides, Tübinger Vorlesungen Band 2. Unter Mitwirkung von Maria Schadewaldt, herausgegeben von Ingeborg Schudoma, stw 389, 1982.
- * Die frühgriechische Lyrik, Tübinger Vorlesung Band 3, Unter Mitwirkung von Maria Schadewaldt, herausgegeben von Ingeborg Schudoma, stw 783, 1. Aufl. 1989.
- * Die griechische Tragödie, Tübinger Vorlesung Band 4, Unter Mitwirkung von Maria Schadewaldt, herausgegeben von Ingeborg Schudoma, stw 783, 2. Aufl. 1992.

シャーデヴァルトの外的な、また精神的な経歴については、以下に、論文集『ヘラスとヘスペリア』第二巻に収録された彼自身による回想録をもとに、筆者が自由な形で記した。ヘラスとは周知のようにギリシャの土地を示す言葉であるが、ヘスペリアは、ギリシャから見て西の土地、つまりローマ世界を意味する。したがって、『ヘラスとヘスペリア』は、「ギリシャとローマ」をギリシャ研究家の立場から表現したものである。

以下は、論文集『ヘラスとヘスペリア』第二巻 (S.780 f.) に、初出の文章 (Forscher und Gelehrte, hrsg. von W. Ernst Böhm in Zusammenarbeit mit Geda Praehleke, Stuttgart 1966, 101 f.) に若干の改訂が施されたうえで収録されたシャーデヴァルト自らによる経歴をもとに筆者による自由な形で紹介したものである。

幼少のころから、その後のわたし、ウォルフガング・シャーデヴァルト、の人生にとって、決定的な場所が三つある。郷里の街ベルリン、シュレジアのジーベンゲビルゲ、そしてレジデンツ都市ワイマールである。

わたしは1899年の秋に他界した医者オットー・シャーデヴァルトの息子として1899年3月15日に生まれた。ベルリンでは伝統的なその気質と慣習の中で育てられた。リーゼンゲビルゲはわたしの第二の郷里であるが、聖アンナ礼拝堂の近くにあった「わたしたちの家で」少年時代から高齢に達するまで過ごしたのである。その土地は、ヒルシュベルガータールの果てしのない広がりを見界に持ち、人間の手が触れられていない大自然に囲まれ、私はその地で最も幸福な時を過ごした。ワイマールでは、わたしが10歳になって以来、最年長の姉の家を毎年一回訪ね一週間ほどの時間をすごした。このワイマールの地で、私は、はやくからゲーテとその環境の世界を知ったのである。その後、学業から解放され保養のために訪れた1917年の夏に、ゲーテのほとんどの作品をリーゼンゲビルゲで読んだのである。この経験を通して、ゲーテの詩と思想に集中することが、古典語、とくにギリシャ語の詩作品や哲学の理解にわたしの生涯の課題になることになった。

20年代の初めにわたしは、ベルリン大学でウルリッヒ・ヴィラーモヴィッツ・メレンドルフとヴェルナー・イエーガーの下で、勉学にいそしんだ。このことを私は幸運な出来事と考えている。この二人の人物から、伝統的で、かつまた最新のスタイルの古代学を学んだのである。旧来のスタイルの文献学者としてわたしは、今日でも、文芸学やその他多くの事物にとっては観察と解釈が確実な基礎となるのだ、と確信を抱いている。考古学の分野での私の師は、ゲルハルト・ローデンヴァルトだった。彼はわたしに、私の友人ベルンハルト・シュヴァイツァーに対してと一緒に、古代芸術の本質を最善の仕方で開催してくれた。わたしは、ドイツ考古学研究所の中心的な部門で、4年間、ローデンヴァルトの助手として務めたが、学問の組織的な作業の仕方を学んだ。

わたしは、ケーニヒスブルク大学(1928—1929)、ブライスガウのフライブルク大学(1929/1934)、

ライプチヒ大学 (1934・1941)、ベルリン大学 (1941—1950) で教授職にあった。その後チュービンゲン大学で教授になり、わたしのその後の永住の地となるこのシュヴァーベン土地で古典文献学 (ギリシャ研究) とギリシャ文化の影響の教授として活動した。この土地は、はからずも幸運な活動場所となった。ほぼ40年の長きにわたって私は、フンボルトの精神に刻印されたドイツの諸大学の長所と、また同様にその欠点を学び経験した。結論として、現在、大学には、さまざまな規則がたてられその改革が図られており、技術—産業社会の変化によって、わたし達の教養の本質はその代償を求められているが、大学が生産的な教えと探求という自らの課題を充足させるべきならば、大学には自由の内面的場所が存在し続けなければならない、と考えている。

仕事においては、私は、とくにギリシャ悲劇、歴史叙述、抒情詩、そして、何よりもホメロス研究への新しい導入口を開き導きの糸を作り上げようとした。ホメロス研究においては、イリアスとこの叙事詩の作者の一体性を構造的に観察することによって、明確に、信頼するにたるものとして明示するための方法的な可能性が幸運なしかたで生みだされた。分散している感のあるこの研究のさい、二つの事柄が私を導いてくれたのである。ひとつは、「特殊なものの中に普遍がある」というゲーテの言葉である。また同様に、古代世界の事物を対象にするとときそれらの本質の探求は、近代のヨーロッパの文化においてそれらが連続的に与えている影響から切りはなしてなされてはならないという確信である。

わたしの論文集『ヘラスとヘスペリア』はこのような理由から、古代世界と近代文学にかんするわたしの論文集にとり意味あるタイトルなのである (1960年)。わたしの確信するところでは、歴史的な差異の存在にもかかわらず、あるヨーロッパ的な現在性というものが存在するということである。この現在性というのは、ホメロスと聖書から私たちの時代に至るまで到達するものであり、おそらくは、いまや新たに到来した技術的—産業社会的な世界文明によってある新しい始まりが据えられる、ということなのである。

近代の技術と対決する、これを私は自分の義務と考えているのであるが、とくにこのことをギリシャ人は、ヨーロッパのエンテレキエのトレーガーとして、彼らが作りあげた原理、カテゴリー、造形と思考のモデルによって、私たちが、さまざまな形で危機にさらされている世界の中にある私たちの文化の状況の分析しようとするとき、多大なものを供給してくれるのであり、私たちはそれらを利用できるのである。——ギリシャ人の言葉をふたたび新しく、また直接的に聞かしめるものたらしめるために、わたしは過去20年来翻訳に身をささげてきた。わたしはこの翻訳の仕事のうちに自分の文献学者としての働きが総合的に結び付けられているのを見るのである。オデュッセウスのドイツ語訳 (1958・60年)、12のアッティカの劇作品のドイツ語訳を完成させた。舞台、ラジオ放送、テレビなども、私の試みがより多くの人々に知られわたるのに貢献してくれた。

古代ギリシャの世界に関するこのような仕事とともに、またそれらとの相互影響のうちに、ゲーテは、それはわたしの少年時代の出発点になっているのだが、わたしをいつも捕らえたものだ。私がゲーテの解釈に貢献したものは、わたしの『ゲーテ研究、—自然と古代—』 (1963年) に収められている。ゲーテの言語と、同時にまたその思想と詩作の世界の解明を意図して、1946年ベルリンのドイツ科学アカデミーに数巻からなる浩瀚な『ゲーテ辞典』 (Goethe - Woerterbuch) が企画された。この企画は、ハイデルベルクとゲッティンゲンのアカデミー、さらにチュービンゲン大学とハンブルク大学によって引き継がれている。今ようやくその第5巻が印刷に付されたところである。(チュービンゲン大学の R. プライマイヤー氏の最近の報告によれば、この『ゲーテ辞典』は2012年の時点において第6巻第二分冊項目 < Mittwoch > まで刊行されているとのことである。)

また、シャーデヴァルトの業績の学問的影響については、60歳、70歳、それぞれの誕生日を記念して出版された記念論文集 *Das Altertum und jedes neue Gute; SYUNOUSIA Festgabe für Wolfgang Schadewaldt zum 15. März 1965. In Namen seiner Tübinger Schüler*, herausgegeben von Hellmut Flasher und Konrad Gaiser, Pfullingen 1965 へ寄稿された様々な分野における論考を見れば理解できよう。また、2005年その叢書 *Spudasmata* の第百号は、W. Schadewaldt und die Gräzistik des 20. Jahrhunderts, mit den Beiträgen von Helmut Flasher, Hans Krämer, Wolfgang Kullmann, Klaus Oehler, Ute Ursula Schmidt-Berger, Ernst-Richart Schwinge Karl-Hainz Stanzel und Thomas Alexander Szlezak, Hildesheim, Zürich, New York (= *Spudasmata. Studien zur Klassischen Philologie und ihren Grenzgebieten. Begründet von Hildebrecht Hommel und Ernst Zinn. Herausgegeben von Gottfried Kiefner und Ulrich Köpf, Band 100*) を刊行し、シャーデヴァルトの業績が彼の関わったさまざまな領域から検討された。本

書の中では彼の下から K. Gaiser, H.-J. Krämer などによって確立されたテュービンゲン・プラトン学派の業績が認められる。Krämer 教授の寄稿論文 Wolfgang Schadewaldt und das Problem des Humanismus などは、シャーデヴァルトの業績を総括する視点としてフマニズムを掲げているが、このことは、シャーデヴァルトの業績に対して、西洋の文化や思想に関心を持つ者の誰しもが関心を抱かざるを得ないことを意味している。以下の、上記祝賀論文集とスプダスマタのシャーデヴァルト特集号の目次を、さらに1970年に刊行された論文集『ヘラスとヘスペリア』全2巻の目次、『ヘラスとヘスペリア』第2巻の巻末に掲載されたシャーデヴァルトの年代順の業績を提示する。

III

SYNOUSIA

Festgabe für Wolfgang Schadewaldt zum 15. Maerz 1965. In Namen seiner Tübinger Schüler, herausgegeben von Hellmut Flasher und Konrad Gaiser, Pfullingen 1965

Inhalt

Ingebotg Schudoma, Raum und Natur bei Homer, S. 11; *Manfred Forderer*, Der Sänger in der homerischen Schildbeschreibung, S. 23; *Ludwig Huber*, Herodotos Homerverständnis, S. 29; *Günter Wille*, Zu Stil und Methode des Thukydides, S. 53; *Winfried Elliger*, Sophikles und Apollon, S. 79; *Ilse von Loewenclau*, Die Wortgruppe plane in den Platonischen Schriften, S. 111; *Juergen Wipperfurth*, Eros und Unsterblichkeit in der Diotima-Rede des Symposions, S. 123; *Dieter Mannsperger*, Zur Sprache der Dialektik bei Platon, S. 161; *Konrad Gaiser*, Platons Farbenlehre, S. 173; *Hellmut Flasher*, Die Kritik der platonischen Ideenlehre in der Ethik des Aristoteles, S. 223; *Wolfgang Kullmann*, Zur wissenschaftlichen Methode des Aristoteles, S. 247; *Klaus Baltels*, Der Begriff Techné bei Aristoteles, S. 275; *Heinz Happ*, Ein vermeintliches Aristoteles-Fragment bei Johannes Philoponos, S. 323; *Hans-Joachim Krämer*, Die Sage von Romulus und Remus in der lateinischen Literatur, S. 355; *Godo Lieberg*, Die Bedeutung des Festes bei Horaz, S. 403; *Gertrud Herwig-Hager*, Göthes Properz-Begegnung, S. 429.

Das Altertum und jedes neue Gute

**für Wolfgang Schadewaldt zum 15. Maerz 1970,
herausgegeben von Konrad Gaiser, Stuttgart/Berlin/Koeln/Mainz, 1970**

Erinnerungen,

Marie Luise Kaschnitz, Gedichte, S. 13; *Ilse Langner*, Gruss zum Morgens, S. 17; *Josef Eberle*, carmen: >Rex<, S. 19; *Emil Steiger*, Eine Theokrit-Übersetzung, S. 21; *Benno Reifenberg*, Gradus ad Parnassum, S. 27; *Carl Jacob Burckhardt*, Mein Zugang zur lateinischen Sprache, S. 33;

Philologie

Johannes Theophanes Karkidis, Poetische Gestalten und wirkliche Menschen bei Homer, S. 51; *Jacqueline de Romilly*, Vengeance humaine et vengeance divine: Remarques sur l'Orestie d'Eschyle, S. 65; *Albin Lesky*, Der Heren eigener Geist: Zur Deutung der Chorlieder der Sophokles, S. 79; *Cedric H. Whitmann*, Existentialism and the Classical Hero, S. 99; *Luigi Alfonsi*, Antico e meno-antico in Valerio Flacco, S. 117; *Gerald F. Else*, Uses of the Past, S. 133; *Hans W. Eppelsheimer*, Zur Periodisierung der europaischen Geistesgeschichte, S. 151; *Gerhard Storz*, Zur Komposition von Wilhelm Meisters Lehrjahren, S. 157; *Dorf Sternberger*, Heinrich Heines Götter, S. 167; *Ernesto Grassi*, Der Tod Gottes: Zu einer These von Mallarmé, S. 195; *Ishidora Rosenthal-Kamarinea*, Kostis Palamas und die Wende in der neugriechischen Literatur, S. 215; *Pierre-Paul Sagave*, Antike Welt und moderner Geist in Thomas Manns Doktor Faustus, S. 229; *Inge und Walter Jens*, Betrachtungen eines Unpolitischen: Thomas Mann und Friedrich Nietzsche, S. 237;

Geschichte und Gesellschaft,

Hermann Heimpel, Vom Lernenn der Geschichte, S. 259; *Joseph Vogt und Matthias Schramm*, Synesios vor dem Planisphaerium, S. 265; *Hans Rothfels*, Kirche und Staat im Spiegel der Römischen Frage, S. 313.; *Petry Ernst Schramm*, Zur Literaturgeschichte des Lesenden, S. 325; *Helmut Coing*, Philologie und Jurisprudenz: Eine Analyse der Dialog des Gentilis, S. 343; *Hans Speidel*, Gedanken zu antiken und modernen Feldherrentum, S. 357,

Theologie und Philosophie,

Günther Bornklam, Eine Studie zum Markus-Evangelium, S. 369; *Eduard Spranger*, Sinnstufen (Antwort an Wolfgang Schadewaldt 1957); *Wilhelm Szilasi*, Spiel (Fragmente aus dem Nachlass), S. 391; *Hans Georg Gadamer*, Über das Göttliche im frühen Denken der Griechen, S. 397; *Walter Schulz*, Über die Dialektik von Macht und Ohnmacht in der Geschichte, S. 415,

Naturwissenschaft,

Helmut Hoel, Die Endlichkeit der Welt in antiker und moderner Sicht, S. 429; *Hans Kienle*, Der Mensch in Raum und Zeit und Ewigkeit, S. 449; *Wolf Frhr. von Engelhardt*, Der vom Himmel gefallene Stern: Zu Vergil, Aeneis II 692-700, S. 459; *Hans Friedrich-Freksa*, Abschrift, Umschrift und Uebersetzung von Informatio im Zellgeschehen, S. 477; *Werner Heisenberg*, Der Tendenz zur Abstraktion in moderner Kunst und Wissenschaft, S. 485,

Bildende Kunst und Kunstgeschichte,

Kurt Bittel, Über den hethitischen Mondgott, S. 497; *Ulrich Hausmann*, Zu einer Zeichnung von J. H. W. Tischbein: Goethe in Italien, S. 507; *Hans Wimmer*, Zeichnung: Apollo von Tenea, S. 515; *Heinrich Graf Luckner*, Zeichnung: Medea, S. 517; *Paul Schmitthenner*, Vom Lob des Handwerks, S. 521;

Musik und Theater,

Carl Olf, Notenautograph: Prometheus, S. 526; *Wolfgang Fortnaer*, Notenautograph: Chanson aus der Oper Die Stuart, S. 529; *Gustav Rudolf Sellner*, Schadewaldt und das Theater, S. 533; *Ernst Dietz*, Soll Elektra sterben? Gedanken eines Regisseurs zu Schadewaldts Übertragung der Sophokles-Tragoedie; *Peter Kleinschmidt*, Notizen zu einer Inszenierung der Voegel, S. 543; Nachwort des Herausgebers (*Konrad Gaiser*)

Verzeichnis der Autoren

W. Schadewaldt und die Graezistik des 20. Jahrhunderts,

mit den Beiträgen von *Helmut Flasher, Hans Kraemer, Wolfgang Kullmann, Klaus Oehler, Ute Ursula Schmidt-Berger, Ernst-Richard Schwinge, Karl-Hainz Stanzel und Thomas Alexander Szlezak*, Hildesheim, Zuerich, New York (= Spudasmata. Studien zur Klassischen Philologie und ihren Grenzgebieten. Begründet von *Hildebrecht Hommel* und *Ernst Zinn*. Herausgegeben von *Gottfried Kiefner* und *Ulrich Koepf*, Band 100)

Wolfgang Kullmann, Wolfgang Schadewaldt und Homer 1

Karl-Heinz Stanzel, Wolfgang Schadewaldt und die griechische Lyrik 21

Helmut Flasher, Wolfgang Schadewaldt und die griechische Tragoedie 41

Thomas Alexander Szlezak, Wolfgang Schadewaldt als Uebersetzer 53

Hans Kraemer, Wolfgang Schadewaldt und das Problem des Humanismus 77

Klaus Oehler, Bild — Zeichen — Wort — Gleichnis. Semiotische Einblicke in die Begriffswelt von Wolfgang Schadewaldt 93

Ernst-Richard Schwinge, Wolfgang Schadewaldts Studien zu Goethe 103

Ute Schmidt-Berger, Frauenraub — heute. Zu Schadewaldts >Illias< im Europäischen Gymnasium 123

Helmut Flasher, Biographische Momente in schwerer Zeit 151

Hellas und Hesperien

(1970. zweite, neugestaltete und vermehrte Ausgabe)

Zum siebzigsten Geburtstag von Wolfgang Schadewaldt am 15. März 1970
Zweite, neugestaltete und vermehrte Ausgabe unter Mitarbeit von Klays Bartels,
herausgegeben von Reihard Thurow und Ernst Zinn,
Erster Band: Zur Antike, Zweiter Band: Antike und Gegenwart

Band I.

Inhaltsübersicht

Homer

- Die Wandlung des Homer-Bildes in der Gegenwart 9
- Die homerische Frage gestern und heute 16
- Hektor in der Ilias 21
- Zur Geschichtlichkeit des Troischen Krieges 38
- Der Prolog der Odyssee 38
- Neue Kriterien zur Odyssee-Analyse . Die Wiedererkennung des Odysseus und der Penelope 58
- Anhang: Die erste Begegnung des Odysseus und der Penelope (Odyssee 18, 158 ff.)
- Kleiderdinge. Zur Analyse der Odyssee 79
- Der Helioszorn in der Odyssee 93
- Anhang: Verzeichnis der dem Dichter B angehörenden Partien der Odyssee 105
- Einleitung fuer die Schallplatte <<Odyssee>> 106

Griechische Lyrik

- Lebenzeit und Greisenalter im frühen Griechentum 109
- Das Gedanken an die Toten in der Antike 127
- Zu Sappho 134
- Sappho: <<An die Tochter Kleis>> 145
- Zwei Oden Pindars auf Thereo von Akragas, Sieger zu Olympia mit dem Vierghespann (Dritte und zweite Olympische Ode) 153
- Pindars zehente Nemeische Ode 172
- Besprechung: Leonhard Illig, Zur Form der pindarischen Erzählung 181

Griechische Tragödie

- Das Drama der Antike in heutiger Sicht 187
- Furcht und Mitleid? Zur Deutung des Aristotelischen Tragödiensatzes 194
- Besprechung: Ernst Howald, Die griechische Tragödie 237

Aischylos

- Der Kommos in Aischylos' <<Choephoren>> 249
- Die <<Niobe>> dse Aischylos 284
- Aischylos' <<Achilleis>> 308
- Aischylos' <<Perser>>. Daten zur Übersetzung 354
- Die Wappnung dse Eteokles. Zu Aischylos' <<Sieben gegen Theben>> 357
- Zu einer Londoner Kabne aus Cerveteri 367
- Sophokles
- Sophokles und Athen 370
- Sophokles und das Leid 385
- Sophokles 402
- 1. Das Leben und der Mensch 402
- 2. Die Dichtung 408
- 3. Daten zu den einzelnen Dramen 415
- Einleitung zur <<Antigone>> des Sophokles von Hölderlin in der Vertonung von Carl Orff
- Der <<König Ödipus>> des Sophokles in neuer Deutung 466

Zum zweiten Stasimon des <<König Oedipus>> 476
Experimentelle Philologie 483
Besprechung: Karl Reinhardt, Sophokles 496
Besprechung: T. B. Webster, An Introduction to Sophokles 500

Euripides

Zum <<Phrixos>> des Euripides 505
Zu einem Florentiner Papyrusbruchstück aus dem <<Alkmeon in Psophis>> des Euripides 516
Griechische Komödie
Die <<Acharner>> des Aristophanes. Daten zur Übersetzung und Bühnenbearbeitung 535
Die <<Vogel>> des Aristophanes. Daten zur Übersetzung 540
Die <<Lysistrata>> des Aristophanes in neuer Übersetzung 543
Daten zu den <<Froechen>> des Aristophanes 546
Menander 549
Geschichtsschreibung
Die Anfänge der Geschichtsschreibung bei den Griechen 559
Das Religioes-Humane als Grundlage der griechischen Objektivität bei Herodot 580
Die Rede des Perikles für die Gefallenen. Aus dem Geschichtswerk des Thukydides
verdeutschte 593

Philosophie und Wissenschaft,

Das Welt-Modell der Griechen 603
Platon und Kratylos. Ein Hinweis 626
Die Apologie des Sokrates 632
Eudoxos von Knidos und die Lehre vom unbewegten Beweger 635
Der Hippokratische Eind (Übersetzung) 655
Zur antiken Humanität
Das Bild des griechischen Menschen 657
Der Gott von Delphi und die Humanitätsidee 669
Humanitas Romana 685
Zur römischen Dichtung
Sinn und Werden der Vergilischen Dichtung 701
Bemerkungen zur <<Hecyra>> des Terenz 722
Lukrez I, 50 744

Allgemeines zur Literatur,

Das Wort der Dichtung. Mythos und Logos 750
Von der Mündlichkeit des Wortes 772
Der Umfang des Begriffs der Literatur in der Antike 782
Versio Latina
Anacreonteum Latine versum 797
Anhang
Hinweis 799
Register 799
Ausführlicher behandelte Stellen 799
Griechische und lateinische Wörter 806
Namen aus der modernen Forschung 807
Namen und Sache 812
Nachweis zu den Bildtafeln 824

Band II

Inhaltsuebersicht

*Zur neueren Literatur**Shakespere*

Shakespere und die griechische Tragödie. Sophokles' <<Elektra>> und <<Hamlet>> 7.

Shakesperes <<König Lear>> und Sophokles' <<König Ödipus>>28

Winckelmann

Winckelmann und Homer 37

Winckelmann als Exzerptor und Selbstdarsteller 74

Winckelmann und Rilke. Zwei Beschreibungen des Apollon 95

Goethe

Wort und Sache im Denken Goethes 117

Schiller

Der Weg Schillers zu den Griechen 127

Zur Tragik Schillers 133

Antikes und Modernes in Schillers <<Braut von Messina>>144

Hölderlin

Hölderlins Weg zu den Göttern 167

Das Bild der exentrischen Bahn bei Hölderlin 175

Hölderlin und Homer. Erster Teil 189

Hölderlin und Homer. Zweiter Teil 214

Die Empedokles-Tragödie Hölderlins 261

Hölderlins Übersetzung des Sophokles 275

Kleist

Der <<Zerbrochene Krug>> von Heinrich v. Kleist und Sophokles' <<König Ödipus>> 333

Richard Wagner

Richard Wagner und die Griechen. Drei Bayreuther Vorträge 341

Richard Wagner und die Griechen 343

Die Ringdichtung und Aischylos' <<Prometheus>> 365

Nachlese 386

Gerhart Hauptmann

Gerhart Hauptmann und die Griechen. Zum <<Bogen des Odysseus>> 406

T. S. Eliot

Thomas Stearns Eliot 411

Carl Olff

Carl Orff: <<Trionfi>>418

Das Werk Carl Olffs und sein neues Ostspiel 420

Carl Olff und die griechische Tragödie. <<Antigone>> <<Pedipus>> <<Promethues>> 423

*Fortleben der Antike**Gegenwart der Antike*

Die Gegenwartigkeit der Antike in unserer Zeit 436

Heimweh nach Hellas heute ? 442

Cecil Maurice Bowra, Klassisches Griechenland. Eine Einführung 447

Wandel des Griechenbildes 448

Griechentum und moderne Technik

Die Anforderungen der Technik an die Geisteswissenschaften 461

Die Welt der modernen Technik und die altgriechische Kulturidee 485

Natur – Technik – Kunst 497

Die Begriffe <<Natur>> und <<Technik>> bei den Griechen 512

Zur Werner Heisenbergs Darstellung der Entwicklung der modernen Atomphysik 525

Bildung und Philologie

Sinn und Wert der humanistischen Bildung im Leben unserer Zeit 528

Das humanistischce Bildungsideal und die Förderungen unserer Zeit 536
Gedanken zu Ziel und Gestaltung des Unterrichts in den alten Sprachen auf der Oberstufe
unserer altsprachlichen Gymnasien 544
Lehren, Lernen, Erziehen, Bilden 566
Die Neuausgabe von Bismarcks <<Erinnerungen und Gedanke>> und die Klassische
Philologie 581
Die Situation der Klassischen Philologie heute 589
Einblick in die Werkstätte meiner Arbeit 598
Die <<Philologische Methode>>. Ein Apophthegma von Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff
606

Übersetzung und Bühne

Das Problem des Übersetzens 608
Antike Tragödie auf der modernen Bühne. Zur Geschichte der Rezeption der griechischen
Tragödie auf der heutigen Bühne 622
Antikes Drama auf dem Theater heute. Übersetzung Inszenierung 650
Aus der Werkstatt meines Übersetzens. Dargetan an der Anrufung des Eros in Sophokles'
<<Antigone>> 671
Die Übersetzung im Zeitalter der Kommunikation 680

Begrüßungen

Für Alfred Koerte. Widmungsepigramm 689
Alfred Koerte. Zum siebzigsten Geburtstag am 5. September 1936 690
Begegnung mit Eduard Spranger 692
Hildebrecht Hommel sechzig Jahre alt 695
Novo Ennio meo. Josef Eberle zum fünfundsechzigsten Geburtstag 697

Nachrufe

Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff. Zum hundertsten Geburtstag am 22. Dezember 1948 698
Karl Reinhardt und die Klassische Philologie 700
Gedenkrede auf Werner Jaeger 707
Gedenkworte auf Werner Jaeger 722
Gedenkworte fuer Eduard Spranger 730
Nachruf auf Ludwig Deubner 736
Nachruf auf Richard Harder 739
Nachruf auf Bernhard Schweitzer
Nachruf auf Erwin Wolff 747
Ein Wort des Gedenkens für Adolf Deissmann 749
Nachruf auf Kurd von Hardt. Nach dem Kallimachos 752

Ein Paignion
Odysseus-Abenteuer

Persöhnliches
Lebensgang 780
Antrittsrede. Gehalten im Sommer 1943 in der Preussischen Akademie der Wissenschaften zu
Berlin 782
Antrittsrede. Gehalten im Sommer 1958 in der Heidelberger Akademie der Wissenschaften 784
Lob Berlins 787
Das Reh 809
Die Metaphysik der Hundemarke 814
Epigramma invectivum plueteo auditorii inscriptum 823

Anhang

W. シャーデヴァルト・ビブリオグラフィー
Bibliographie
Verzeichnis der Schriften Wolfgang Schadewaldts

タイトルは出版年に従って提示してある。論文が短縮された場合や若干の修正が加えられた場合も、初版のもののあとに提示してある。そのさい『ホメロスの世界と作品』(Vom Homers Welt und Werk, 1944, 1951/2, 1959/3, 1965/4)と『ヘラスとヘスペリア』(Hellas und Hesperien, 1960, 1970/2)は、それぞれ HWW および HuH と省略形を用いた。上部に印刷された数字は版を表している。2 巻に分けられた新しい版の『ヘラスとヘスペリア』におさめられた論文には、タイトルの前に*の印が付けられている。独立の出版物として刊行されたものの新版や改訂版は、また他の外国語に翻訳されたものはそれぞれの出版年の箇所に別記してある。ラ디오やテレビをつうじた翻訳の舞台上演と放送の提示は W.S. の著作 >>Antikes Drama and dem Theater heute(1970)<<から借用した (Reinhard Thurow)。

- 1924 * *Zu einer Londoner Kanne ans Cerveteri*. Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Römische Abteilung, Band 38/39, 1923/24, 490 f., Tafel 4.2 - HuH¹ 211-213 - HuH² I 367-369.
- 1926 *Monolog und Selbstgespräch*. Untersuchungen zur Formgeschichte der griechischen Tragödie. Neue Philologische Untersuchungen 2, Berlin 1926, 270 S. - Berlin-Zürich-Dublin² 1966.
- 1927 * *Das Problem des Übersetzens*. Öffentlicher Habilitationsvortrag an der Universität Berlin 1927. Die Antike 3, 1927, 287-303 - HuH¹ 523-537 - Das Problem des Übersetzens. Wege der Forschung 8, hrsg. von H. J. Störig, Darmstadt 1963, 249-267. ²1969 - HuH² II 608-622.
- 1928 *Der Aufbau des Pindarischen Epinikion*. Schriften der Königsberger Gelehrten Gesellschaft, Geisteswissenschaftliche Klasse, 5, 1928, Heft 3. Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff in Dankbarkeit und Verehrung dargebracht - Gleichzeitig: Halle 1928, 85 S.-Tübingen² 1966.
Besprechung: Eugen Petersen, Die attische Tragödie als Bild- und Bühnenkunst, Bonn 1915. In: Franz Studniczka, Eugen Petersen, Biographisches Jahrbuch für Altertumskunde 48, 1928, 137-140.
- * *Zum «Phrixos» des Euripides*. Hermes 63, 1928, 1-14 - HuH¹ 305-316 - HuH² I 505-515.
- 1929 *Die Geschichtschreibung des Thukydides*. Ein Versuch. Berlin 1929, VIII. 100 S. Nach einem Vortrag, gehalten auf der Fachtagung der Klassischen Altertumswissenschaft zu Weimar im Mai 1928. Meinem Lehrer Werner Jaeger zugeeignet.
Sophokles, Aias und Antigone. Neue Wege zur Antike 8, 1929, 61-109.
- 1930 *Begriff und Wesen der antiken Klassik*. Den Königsberger Freunden. Die Antike 6, 1930, 265-283 - Das Problem des Klassischen und die Antike. Acht Vorträge, hrsg. von W. Jaeger, Leipzig-Berlin 1931, 15-32. Darmstadt² 1961.
- * *Bemerkungen zur «Hecyra» des Terenz*. Hermes 66, 1931, 1-29 - HuH¹ 472-494 - HuH² I 722-744.
- * *Sinn und Werden der Vergilischen Dichtung*. Vortrag, gehalten als Festrede zum zweitausendsten Geburtstag Vergils auf dem Meersburger Ferienkurs am 11. August 1930, in neuer Fassung wiederholt in Freiburg bei einer Veranstaltung der Freunde des humanistischen Gymnasiums. In: Das Erbe der Alten, Zweite Reihe, Heft 20, Aus Roms Zeitwende. Von Wesen und Wirken des Augusteischen Geistes, Leipzig 1931, 67-95 - HuH¹ 498-519 - Wege zu Vergil. Drei Jahrzehnte Begegnungen in Dichtung und Wissenschaft. Wege der Forschung 19, hrsg. von H. Oppermann, Darmstadt 1963, 43-68 - HuH² I 701-722.
- 1932 *Goethe und das Erlebnis des antiken Geistes*. Freiburger Universitätsreden 8, 1932, Freiburg 1932, 21 S. - Goethestudien, 1963, 9-21.
Hermes. Zeitschrift für Klassische Philologie. Band 67, 1932 und Band 68, 1933: In

- Gemeinschaft mit Helmut Berve und Eduard Fraenkel hrsg. von Alfred Körte und Wolfgang Schadewaldt. - Band 69, 1934 bis Band 79, 1944: Herausgegeben von Helmut Berve, Alfred Körte, Wolfgang Schadewaldt.
- * *Besprechung: Ernst Howald, Die griechische Tragödie*, München-Berlin 1930. Gnomon 8, 1932, 1-13 - HuH¹ 335-346 - HuH² I 237-248.
- * *Der Kommos in Aischylos' «Choephore»*. Hermes 67, 1932, 312-354 - HuH¹ 106-141 - HuH² I 249-284.
- Das Vermächtnis des Perikles*. Aus dem zweiten Buche der Historien des Thukydides. Die Antike 8, 1932, 23-34.
- 1933 * *Lebenszeit und Greisenalter im frühen Griechentum*. Die Antike 9, 1933, 282-302 - HuH¹ 41-59 - HuH² I 109-127.
- * *Lukrez 1, 50*. Hermes 68, 1933, 460-464 - HuH¹ 494-498 - HuH² I 744-749.
- * *Die Neuauflage von Bismarcks «Erinnerung und Gedanke» und die Klassische Philologie*. Neue Jahrbücher für Wissenschaft und Jugendbildung 9, 1933, 244-251 - HuH¹ 850-858 - HuH² II 581-589.
- 1934 * *Die Anfänge der Geschichtschreibung bei den Griechen*. Die Antike 10, 1934, 144-168 - HuH¹ 395-416 - Auszug: Herodot als erster Historiker, in: Herodot. Eine Auswahl aus der neueren Forschung. Wege der Forschung 26, hrsg. von W. Marg, Darmstadt 1962 (gleichzeitig München 1962), 109-121. ²1965 - HuH² I 559-580.
- Einzelner und Staat im politischen Denken der Griechen*. Vergangenheit und Gegenwart. Zeitschrift für Geschichtsunterricht und politische Erziehung 24, 1934, 16-32.
- * *Besprechung: Leonhard Illing, Zur Form der pindarischen Erzählung*, Berlin 1932. Deutsche Literaturzeitung 55, 1934, 1407-1412 - HuH¹ 94-98 - HuH² I 181-186.
- * *Die «Niobe» des Aischylos*. Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, 1933/34, 3. Abh., Heidelberg 1934, 32 S. - HuH¹ 141-166 - HuH² I 284-308.
- 1935 *Homerische Szenen I. Hektor und Andromache*. Die Antike 11, 1935, 149-170 - HWW¹ 135-161 - HWW²⁻⁴ 207-233.
- * *Sophokles und Athen*. Antrittsrede, gehalten an der Universität Leipzig im Januar 1935. Wissenschaft und Gegenwart 7, Frankfurt am Main 1935, 23 S. - HuH¹ 215-230 - HuH² I 370-385.
- 1936 * *Aischylos' «Achilleus»*. Dem Andenken Girolamo Vitellis gewidmet. Hermes 71, 1936, 25-69 - HuH¹ 166-211 - HuH² I 308-354.
- Homerische Szenen II. Die Entscheidung des Achilleus*. Die Antike 12, 1936, 173-201 - HWW¹ 162-195 - HWW²⁻⁴ 234-267.
- * *Für Alfred Körte*. Widmungsepigramm zu seinem siebzigsten Geburtstag am 5. September 1936. Hermes. Zeitschrift für Klassische Philologie. Alfred Körte - Festheft, Berlin 1936 (Hermes 71, 1936, Heft 3, ohne Widmung). - HuH¹ 1044 - HuH² II 689.
- * *Alfred Körte zum 70. Geburtstag am 5. September 1936*. Forschungen und Fortschritte 12, 1936, 315 - HuH² II 690f.
- * *Zu Sappho*. Hermes 71 (Alfred Körte - Festheft), 1936, 363-373 - HuH¹ 66-77 - HuH² I 134-145.
- 1937 *Die Antike*. Zeitschrift für Kunst und Kultur des klassischen Altertums, hrsg. von Wolfgang Schadewaldt, Bernhard Schweitzer, Johannes Stroux. Band 13, 1937 (ab Heft 2, S. 77 ff.) bis Band 20, 1944 (erschieden: 2 Hefte, bis S. 174).
- * *Besprechung: Karl Reinhardt, Sophokles*, Frankfurt am Main 1933. Deutsche Literaturzeitung 58, 1937, 997-1002 - HuH¹ 296-300 - HuH² I 496-500.
- * *Besprechung: T. B. L. Webster, An Introduction to Sophocles*, Oxford 1936. Gnomon 13, 1937, 586-590 - HuH¹ 301-305 - HuH² I 500-504.
- 1938 *Homer und die Homerische Frage*. Die Antike 14, 1938, 1-21 - Auch selbständig: Berlin 1938, 21 S. - HWW¹⁻⁴ 9-35.

- Iliasstudien*. Abhandlungen der Sächsischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, Band 43, Nr.6, Leipzig 1938, 182 S. - Leipzig ²1943 - Darmstadt ³1966.
- Der Schild des Achilleus*. Neue Jahrbücher für Antike und deutsche Bildung 1, 1938, 65-82 - HWW¹, 280-302 - HWW²⁻⁴ 352-374.
- 1940 *Otfrid Becker* †. Gnomon 16, 1940, 237-239.
- 1941 *Hoinerforschung einst und jetzt*. Frankfurter Zeitung. Reichsausgabe, 8.Juli 1941.
- * *Winckelmann und Homer*. Vortrag, gehalten zur Winckelmann-Feier des Archäologischen Instituts in der Universität Leipzig am 7. Dezember 1940. Leipziger Universitätsreden 6, Leipzig 1941, 69 S. - HuH¹ 600-636 - HuH² II 37-73.
- 1942 *Ital Gelzer* †. Gnomon 18, 1942, 61-63.
- Homer und sein Jahrhundert*. Nach einem im April 1941 auf der Fachtagung der Klassischen Altertumswissenschaft zu Berlin gehaltenen Vortrag. In: Das Neue Bild der Antike, hrsg. von H. Berve, I. Band: Hellas, Leipzig 1942, 51-90 - HWW¹⁻⁴ 87-129.
- Legende von Homer dem fahrenden Sänger*. Ein altgriechisches Volksbuch, übersetzt und erläutert von Wolfgang Schadewaldt. Leipzig 1942, 102 S. - Sonderausgabe 1947 - Neuausgabe 1959.
- 1943 *Iliasstudien* (1938). 2., verb. Aufl., Leipzig 1943. (Durch Brand im Verlagshaus zerstört.)
- * *Die Rede des Perikles für die Gefallenen*. Aus dem Geschichtswerk des Thukydides verdeutscht. In: Hellas. Bilder zur Kultur des Griechentums, hrsg. von H. von Schoenebeck und W. Kraiker, Burg b. M. 1943, 103-107 - Überarbeitet: HuH¹ 417-423 - HuH² I 593-600.
- 1944 *Die Gestalt des homerischen Sängers*. In: HWW¹⁻⁴ 54-86.
- Hektors Tod*. In: HWW¹ 196-279 - HWW²⁻⁴ 268-351.
- Von Homers Welt und Werk*. Aufsätze und Auslegungen zur homerischen Frage. Leipzig 1944, 354 S., 23 Abb. auf 12 Tafeln - Stuttgart ²1951, ³1959, ⁴1965.
- Neues zur Ilias. In: HWW¹⁻⁴ 36-53.
- * *Sophokles und das Leid*. Potsdamer Vorträge 4, Potsdam 1944, 30 S. - 2., verb. Aufl. 1944, 31 S. - ³1947, ⁴1948 - HuH¹ 231-247 - Gottheit und Mensch in der Tragödie des Sophokles. Vorträge von Hans Diller, Wolfgang Schadewaldt, Albin Lesky. Darmstadt 1963, 31-57 - HuH² I 385-401.
- 1946 *Die Heimkehr des Odysseus*. Für Johannes Stroux zum sechzigsten Geburtstag. In: Taschenbuch für junge Menschen, hrsg. von P. Suhrkamp, Berlin-Frankfurt 1946, 177-224 - HWW²⁻⁴ 375-412.
- 1947 *Legende von Homer dem fahrenden Sänger*. Deutsch von Wolfgang Schadewaldt. Zeichnungen von Graf Heinrich Luckner. Potsdam 1947, 62 S. (Sonderausgabe: Übersetzung und Nachwort; erstmals 1942.)
- Sophokles und des Leid* (²1944). 3., unv. Aufl., Potsdam 1947.
- 1948 *Sophokles und das Leid* (³1947). 4., unv. Aufl., Potsdam 1948.
- 1949 *Goethe und die Antike*. Eine Sammlung, hrsg. von Ernst Grumach. Mit einem Nachwort von Wolfgang Schadewaldt. Berlin 1949, 2 Bände. - Das Nachwort «Goethes Beschäftigung mit der Antikes» (II, 971-1050) in: Goethestudien, 1963, 23-126.
- Goethe und Homer*. Trivium 7, 1949, 200-232 - Goethestudien, 1963, 127-157.
- Das Goethe-Wörterbuch*. Eine Denkschrift. In: Goethe. Neue Folge des Jahrbuchs der Goethe-Gesellschaft 11, 1949, 293-305 - Auch selbständig als Privatdruck, 1955 - Auszug: Zu Goethes Sprache, in: Goethestudien, 1963, 397-404.
- * *Nachruf at Ludwig Deubner*. In: Jahrbuch der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1946-1949, Berlin 1950, 139-141 (mit einem Verzeichnis der Arbeiten Ludwig Deubners, S.142-144). - HuH¹ 1023-1025 - HuH² II 736-739.
- * *Odysseus-Abenteuer*. Aus einer gesprächsweisen homerischen Improvisation über Irrfahrer-Angelegenheiten. In: Martin Heideggers Einfluß auf die Wissenschaften. Aus Anlaß seines sechzigsten Geburtstags verfaßt von C. Astrada u.a., Bern 1949, 94-121 -

- HuH¹ 982-1008 - HuH² II 753-779.
- * *Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff zum 100. Geburtstag*. Ansprache, gehalten anlässlich der Gedenkfeier der Berliner Akademie der Wissenschaften zum hundertsten Geburtstag Ulrich von Wilamowitz-Moellendorffs. Gymnasium 56, 1949, 80f. - HuH¹ 1021f. - HuH² II 698f.
- 1950 * *Hölderlin und Homer*. Erster Teil. In: Hölderlin-Jahrbuch 1950, Tübingen 1950, 2-27 - HuH¹ 681-705 - HuH² II 189-213.
Sappho - Welt und Dichtung. Dasein in der Liebe. Potsdam 1950, 191 S. - Auszug: Sappho. Das Schönste (fr.27a D.), in: *Ars Interpretandi* 2. Antike Lyrik, hrsg. von W. Eisenhut, Darmstadt 1970, 73-81.
- * *Die Wandlung des Homerbildes in der Gegenwart*. In: *Vom Geist der deutschen Wissenschaft. Ansprachen und Vorträge*, Wiesbaden 1950, 29-36 - Universitas 7, 1952, 233-240 - HuH¹ 9-16 - HuH² I 9-16.
- 1951 *Von Homers Welt und Werk*. Aufsätze und Auslegungen zur homerischen Frage(1944). 2., verm. Aufl. Stuttgart 1951, 450 S., 28 Abb. auf 16 Tafeln.
- * *Lear und Ödipus*. In: *Das neue Forum*, hrsg. von E. Vietta und G. R. Sellner, Heft 1, Darmstadt 1951, 5-12 - HuH¹ 570-578 - HuH² II 28-36.
Carl Orff, Trionfo di Afrodite. Concerto scenico. Deutsche Übertragung von Wolfgang Schadewaldt. Mainz 1951 (Textbuch) - Neuauflage 1965, in: *Carl Orff, Trionfi. Trittico teatrale*, Mainz 1965.
- * *Das Bild der exzentrischen Bahn bei Hölderlin*. Vortrag, gehalten zur Jahresversammlung der Friedrich Hölderlin Gesellschaft am 7.Juni 1952 in Tübingen. In: Hölderlin-Jahrbuch 1952, Tübingen 1952, 1-16 - HuH¹, 666-680 - HuH² II 175-189.
Einblick in die Erfindung der Ilias. Ilias und Memnonis. In: *Varia Variozum*. Festgabe für Karl Reinhardt, dargebracht von Freunden und Schülern zum 14. Februar 1951, Münster-Köln 1952, 13-48 - HWW²⁻⁴ 155-202.
- * *Eudoxos von Knidos und die Lehre vom unbewegten Beweger*. In: *Satura. Früchte aus der antiken Welt*. Otto Weinreich zum 13. März 1951 dargebracht, Baden-Baden 1952, 103-129 - HuH¹ 451-471 - HuH² I 635-655.
- * *Zu einem Florentiner Papyrusbruchstück aus dem «Alkmeon in Psophis» des Euripides*. *Hermes* 80, 1952, 46-66 - HuH¹ 316-334 - Euripides. *Wege der Forschung* 89, hrsg. von E. -R. Schwinge, Darmstadt 1968, 153-176 - HuH² I 516-534.
Die homerische Gleichniswelt und die kretisch-mykenische Kunst. Zur homerischen Naturanschauung. In: *Hermeneia*. Festschrift, Otto Regenbogen zum 60. Geburtstag am 14. Februar 1951 dargebracht von Schülern und Freunden, Heidelberg 1952, 9-27, Tafel I-VIII - HWW²⁻⁴ 130-154.
- 1953 * *Das Drama der Antike in heutiger Sicht*. Universitas 8, 1953, 591-599 - HuH¹ 99-106 - Antike und Gegenwart, 1966, 7-15 - HuH² I 187-194.
- * *Hölderlin und Homer*. Zweiter Teil. In: Hölderlin-Jahrbuch 1953, Tübingen 1953, 1-53 - HuH¹, 705-752 - HuH² II 214-261.
Carl Orff, Carmina Burana. Lieder aus der Benediktbeurer Handschrift. Weltliche Gesänge für Soli und Chor mit Begleitung von Instrumenten und mit Bildern. Deutsche Übertragung von Wolfgang Schadewaldt. Mainz 1953 (Mit einem Nachwort von W. Schadewaldt) - Neuauflage 1965, in: *Carl Orff, Trionfi. Trittico teatrale*, Mainz 1965.
- * *Carl Orff, Trionfi*. Zur Idee des Werks. In: *Programm der deutschen konzertanten Erstaufführung unter Leitung von Eugen Jochum, München, Saal der Residenz, 5.März 1953* - HuH¹ 858-860 - HuH² II 418-420.
- * *Sappho: «An die Tochter Klein»*. In: *Studies Presented to David Moore Robinson on his Seventieth Birthday*, ed. by G. E. Mylonas and D. Raymond, Washington University, Saint Louis, Missouri, II, 1953, 499-506 - HuH¹ 77-85 - HuH² I 145-153.
Tübinger Beiträge zur Altertumswissenschaft. Heft 38, 1953 bis Heft 43, 1965: Hrsg. von Wolfgang Schadewaldt, Joseph Vogt, Otto Weinreich. - Heft 44, 1968 ff.: Hrsg. von

- Wolfgang Schadewaldt, Joseph Vogt, Otto Weinreich, Ernst Zinn.
- 1954 *Bernhard Schweitzer zum sechzigsten Geburtstag am 3. Oktober 1952*. In: Neue Beiträge zur Klassischen Altertumswissenschaft. Festschrift zum sechzigsten Geburtstag von Bernhard Schweitzer, hrsg. von R. Lullies, Stuttgart 1954, 5f.
- * *Winckelmann als Exzerptor und Selbstdarsteller*. Mit Beiträgen von Walther Rehm. In: Neue Beiträge zur Klassischen Altertumswissenschaft. Festschrift zum sechzigsten Geburtstag von Bernhard Schweitzer, hrsg. von R. Lullies, Stuttgart 1954, 391-409, Tafel 89-91 - HuH¹ 637-657 - HuH² II 74-95.
- 1955 *Zur Entstehung der Elfenszene im 2. Teil des «Faust»*. Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 29, 1955, 227-236 - Goethestudien, 1963, 251-262.
- * *Furcht und Mitleid?* Zur Deutung des Aristotelischen Tragödiensatzes. Hermes 83, 1955, 129-171 - HuH¹, 346-388 - Antike und Gegenwart, 1966, 16-60 - HuH² I 194-236.
- * *Die homerische Frage gestern und heute*. Stuttgarter Zeitung, 11. Jahrgang, Nr. 278, 3. Dezember 1955 - HuH¹ 16-21 - HuH² I 16-21.
- Sophokles, König Ödipus*. Deutsch von Wolfgang Schadewaldt. Berlin-Frankfurt am Main 1955, 95 S. Martin Heidegger zugeeignet.
- * *Zur Tragik Schillers*. Ansprache bei der Schiller-Gedenkfeier im großen Sendesaal des Frankfurter Funkhauses am 9. Mai 1955. In: Schiller. Reden im Gedenkjahr 1955. Im Auftrag der Deutschen Schiller-Gesellschaft hrsg. von Bernhard Zeller. Veröffentlichungen der Deutschen Schiller-Gesellschaft 21, Stuttgart 1955, 303-316 - HuH¹ 832-842 - HuH² II 133-144.
- Von der Wirkung des Trauerspiels*. In: Sonderheft. Shakespeare-Tape 1955. Schauspielhaus Bochum, 5-8 - Prisma. Blätter des Schauspielhauses Bochum 1954/55, Heft 11, 126-129 - HuH¹ 388-391.
- 1956 *Faust und Helena*. Zu Goethes Auffassung vom Schönen und der Realität des Realen im zweiten Teil des «Faust». Richard Harder zum sechzigsten Geburtstag. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 30, 1956, 1-40 - Goethestudien, 1963, 165-205.
- Furcht und Mitleid ?* Zu Lessings Deutung des Aristotelischen Tragödiensatzes. Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 30, 1956, 137-140 - Gotthold Ephraim Lessing. Weg der Forschung 211, hrsg. von G. und S. Bauer, Darmstadt 1968, 336-342.
- * *Gedanken zu Ziel und Gestaltung des Unterrichts in den alten Sprachen auf der Oberstufe unserer altsprachlichen Gymnasien*. Gymnasium 63, 1956, 298-318 - HuH¹ 950-972 - HuH² II 544-566.
- * *Das Gedenken an die Toten in der Antike*. Universitas 11, 1956, 33-39 - HuH¹ 60-66 - HuH² I 127-134.
- Goethes Begriff der Realität*. In: Goethe. Neue Folge des Jahrbuchs der Goethe-Gesellschaft 18, 1956, 44-88 - Goethestudien, 1963, 207-249.
- Griechische Sternsagen*. Fischer Bücherei 129, Frankfurt am Main 1956, 191 S. - Dänische und japanische Übersetzung 1963 - Auszug in: Wort und Sinn. Lesebuch für den Deutschunterricht, III, Paderborn 1964, 87-99 - Neuausgabe 1970.
- * *Hektor in der Ilias*. In: Festschrift, Albin Lesky zum 7. Juli 1956 dargebracht von Freunden und Schülern. Wiener Studien 69, 1956, 5-25 - HuH¹ 21-38 - HuH² I 21-38.
- Die Hölderlinische «Antigone» des Sophokles von Carl Orff*. In: Programmheft der Württembergischen Staatstheater Stuttgart, 1956 - HuH¹ 861f. - Antike und Gegenwart, 1966, 175f.
- * *Friedrich Hölderlin*. In: Die großen Deutschen. Deutsche Biographie in vier Bänden, hrsg. von H. Heimpel, Th. Heuß und B. Reifenberg, Berlin 1956, II, 354-361 - Unter dem Titel «Hölderlins Weg zu den Göttern» in: Hölderlin-Jahrbuch 9, 1955/56, Tübingen 1957, 174-182 - HuH¹ 658-665 - Hölderlin. Beiträge zu seinem Verständnis in unserm

- Jahrhundert, hrsg. von A. Kelletat. Schriften der Hölderlin-Gesellschaft 3, Tübingen 1961, 333-341 - HuH² II 167-175.
- * *Der «König Ödipus» des Sophokles in neuer Deutung.* Schweizer Monatshefte 36, 1956, 21-31 - HuH¹ 277-287 - HuH² I 466-476.
Zum Osterspiel von Carl Orff. In: Programmheft der Württembergischen Staatstheater Stuttgart 8, 1956/57, 118f. - Neufassung 1960.
- * *Sinn und Wert der humanistischen Bildung im Leben unserer Zeit.* Vortrag, gehalten zur Kundgebung der drei humanistischen Gymnasien in Stuttgart am 17. September 1955. In: Mitteilungen des Vereins der ehemaligen Schüler des Eberhard-Ludwigs-Gymnasiums, Sonderheft April 1956, 4-8 - Selbständig: Göttingen-Berlin-Frankfurt am Main 1956, 18 S.²1957 - HuH¹ 934-941 - Texte zur Antike, hrsg. von O. Leggewie, H. Lenzen, J. R. Zinken. Herder-Bücherei 290, Freiburg-Basel-Wien 1967, 29-36 - HuH² II 528-535.
- * *Zum zweiten Stasimon des «König Ödipus».* Studi Italiani di Filologia Classica 27/28, dedicato alla memoria di Giorgio Pasquali, 1956, 489-497 - HuH¹ 287-294 - HuH² I 476-483.
- 1957 * *Die Anforderungen der Technik an die Geisteswissenschaften.* Vortrag, gehalten auf der Jahresversammlung des Stifterverbandes für die Deutsche Wissenschaft am 25. April 1957 in Wiesbaden. In: Forschung und Wirtschaft. Partner im Fortschritt, hrsg. vom Stifterverband für die Deutsche Wissenschaft 6, 1957, Heft 3 (Nicht im Handel) - Auszug: Stuttgarter Zeitung, 4. Mai 1957 - Auszug: Neue Ruhr Zeitung. Mensch und Werk an Rhein und Ruhr, Ausgabe Nr.7 im Oktober 1959 - Selbständig, mit einem Anhang «Zum Bildungsproblem» (Bandaufnahme einer im Rahmen der Jahrestagung bei der Aussprache über «Fachliche und allgemeine Bildung» frei gehaltenen Diskussionsrede): Göttingen-Berlin-Frankfurt am Main 1957, 48 S. - HuH¹, 867-891 - Ohne den Anhang: Humanismus. Wege der Forschung 17, hrsg. von H. Oppermann, Darmstadt 1970, 468-492 - HuH² II 461-484.
- * *Antike Tragödie auf der modernen Bühne.* Zur Geschichte der Rezeption der griechischen Tragödie auf der heutigen Bühne. Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Jahreshaft 1955/56, Heidelberg 1957, 37-64, mit 16 Abb. auf 8 Tafeln - Zugleich selbständig (unveränderte Seitenzählung): Heidelberg 1957, mit 16 Abb. auf 8 Tafeln - Auszug: Programmheft. Carl Orff, Oedipus der Tyrann. Ein Trauerspiel des Sophokles von Friedrich Hölderlin. Uraufführung 11. Dezember 1959 im Großen Haus der Württembergischen Staatstheater Stuttgart, S.26-30 - HuH¹ 543-570 - Antike und Gegenwart, 1966, 67-96 - Sophokles. Wege der Forschung 95, hrsg. von H. Diller, Darmstadt 1967, 500-536 - HuH² II 622-650.
Edition der «Collectanea zu meinem Leben», besorgt von Wolfgang Schadewaldt und Ingeborg Schudoma. In: Johann Joachim Winckelmann, Briefe. In Verbindung mit H. Diepolder hrsg. von W. Rehm. Vierter Band. Dokumente zur Lebensgeschichte, Berlin 1957, 154-163 und 478-480.
Daten zur «Elektra» des Sophokles. In: Programmheft des Landestheaters Württemberg-Hohenzollern 1957/58, 6. Folge, S. 42-45 - HuH¹ 294-296.
- * *Die Metaphysik der Hundemarke.* In: Erziehung zur Menschlichkeit. Die Bildung im Umbruch der Zeit. Festschrift für Eduard Spranger zum 75. Geburtstag am 27. Juli 1957, hrsg. von H. W. Bähr, Th. Litt, N. Louvaris und H. Wenke, Tübingen 1957, 587-597 - HuH¹ 1009-1017 - HuH² II 814-822. (Vgl. E. Spranger, Sinnstufen, in: Das Altertum und jedes neue Gute. Für Wolfgang Schadewaldt zum 15. März 1970, hrsg. von K. Gaiser, Stuttgart-Berlin-Köln-Mainz 1970, 387-390.)
Sinn und Wert der humanistischen Bildung im Leben unserer Zeit (1956). 2., unv. Aufl., Göttingen-Berlin-Frankfurt am Main 1957.
- * *Sinnvolles Verstehen geistiger Zusammenhänge.* In: Eduard Spranger. Bildnis eines geistigen Menschen unserer Zeit. Festschrift zum 75. Geburtstag, Heidelberg 1957, 476-

- 480 - Unter dem Titel «Begegnung mit Eduard Spranger»: HuH¹ 1018-1020 - HuH² II 692-695.
- * *Sophokles, Tragödien*. Deutsch von Friedrich Hölderlin, hrsg. und eingeleitet von Wolfgang Schadewaldt. Fischer Bücherei 162, Frankfurt am Main 1957, 261 S. - Einleitung und Anhang (S.9-95, 258-261) «Hölderlins Übersetzung des Sophokles»: HuH¹ 767-824 - Ohne den Anhang: Antike und Gegenwart, 1966, 113-174 - Gekürzt, ohne den Anhang: Über Hölderlin. Aufsätze von Theodor W. Adorno u. a., hrsg. von J. Schmidt, Frankfurt am Main 1970, 237-293 - HuH² II 275-332.
- * *Das Weltmodell der Griechen*. Ein Vortrag. Die Neue Rundschau 68, 1957, 187-213 - HuH¹ 426-450 - Humanismus. Wege der Forschung 17, hrsg. von H. Oppermann, Darmstadt 1970, 322-352 - HuH² I 601-625.
- * *Der «Zerbrochene Krug» von Heinrich von Kleist und Sophokles' «König Ödipus»*. Schweizer Monatshefte 37, 1957, 311-318 - HuH¹ 843-850 - Heinrich von Kleist. Aufsätze und Essays. Wege der Forschung 147, hrsg. von W. Müller-Seidel, Darmstadt 1967, 317-325 - HuH² II 333-340.
- 1958 *Gruß an den großen Humanisten Werner Jaeger*. Stuttgarter Zeitung, 14. Jahrgang, Nr. 149, 3. Juli 1958.
- * *Richard Harder* †. Gnomon 30, 1958, 73-76 (Mit einer Photographie Harders, die W. Schadewaldt aufgenommen hat; jetzt als Frontispiz in: R. Harder, Kleine Schriften, hrsg. von W. Marg, München 1960) - HuH¹, 1026-1029 - HuH² II 739-743.
- * *Heimweh nach Hellas heute?* Rheinische Post, 13. Jahrgang, Nr. 15, 18. Januar 1958 - Gymnasium 66, 1959, 1-5 - HuH¹ 929-933 - HuH² II 442-447.
- * *Einleitung für die Schallplatte: Homer, Odyssee*. Aus dem ersten und fünften Gesang. Zürich-Stuttgart 1958 - HuH¹ 38-41 - HuH² I 106-108.
- Homer, Die Odyssee*. Übersetzt in deutsche Prosa von Wolfgang Schadewaldt. Rowohlt Klassiker 29/30, Hamburg 1958, 331 S. Werner Jaeger zum siebenzigsten Geburtstag am 30. Juli 1958 - 81.-90. Tausend Januar 1969 - Neuausgabe 1966.
- * *Die «Lysistrata» des Aristophanes in neuer Übersetzung*. In: Programmheft der Schwetzingen Festspiele 1958, 21-25 - HuH¹ 392-394 - HuH² I 543-546.
- * *Der Mensch und die Technik*. Natur - Technik - Kunst. Vortrag, gehalten zur Zehnjahresversammlung des Bundesverbandes Steine und Erden zu München am 10. Oktober 1958. Bauverlag Wiesbaden-Berlin 1958, 32 S. (Nicht im Handel) - Auszug: Physikalische Blätter 15, 1959, 337-341 - Auszug: Programmheft. 32. Bühnentechnische Tagung vom 27.-30. Juli 1959 im Nationaltheater Mannheim, S. 66-78 - Na-tur-Technik-Kunst. Drei Beiträge zum Selbstverständnis der Technik in unserer Zeit, Göttingen-Berlin-Frankfurt am Main 1960, 7-31 - HuH¹ 892-906 - HuH² II 497-512.
- * *Einleitung für die Schallplatte: Platon, Apologie des Sokrates*. Zürich-Stuttgart 1958 - HuH¹ 424-426 - HuH² I 632-634.
- * *Der Prolog der Odyssee*. In: Festschrift für Werner Jaeger. Harvard Studies in Classical Philology 63, 1958, HuH² I 42-58.
- * *Karl Reinhardt und die Klassische Philologie*. Schweizer Monatshefte 38, 1958, 737-744 - HuH¹ 1030-1037 - HuH² II 700-707.
- Die Wiedergewinnung antiker Literatur auf dem Wege der nachdichtenden Übersetzung*. Deutsche Universitätszeitung 13, 1958, 741-744 - Antike und Gegenwart, 1966, 61-66 - HuH¹ 538-542.
- 1959 *Zu Aischylos' «Persern»*. In: Blätter der Städtischen Bühne Heidelberg 1958/59, Heft 9 - HuH¹ 213-215.
- * *Die Gegenwärtigkeit der Antike in unserer Zeit*. Zur Tagung des Deutschen Altphilologen-Verbandes in Stuttgart. Stuttgarter Zeitung, 15. Jahrgang, Nr. 111, 16. Mai 1959 - Überarbeitet: Rheinische Post, 15. Jahrgang, Nr. 61, 12. März 1960 - HuH¹ 922-928 - HuH² II 436-442.
- Goethes Knabenmärchen «Der neue Paris»*. Eine Deutung. Die Neue Rundschau 70,

- 1959, 599-616 - Goethestudien, 1963, 263-282.
Von Homers Welt und Werk. Aufsätze und Auslegungen zur homerischen Frage (²1951). 3., erw. Aufl. Stuttgart 1959, 499 S., 28 Abb. auf 16 Tafeln.
Homer und der Becher von Ischia. In: HWW³⁻⁴ 413-416.
- * *Das humanistische Bildungsideal und die Forderungen unserer Zeit.* Vortrag, gehalten im Süddeutschen Rundfunk im Mai 1959 in der Sendereihe «Probleme einer Schulreform». In: Probleme einer Schulreform. Kröners Taschenausgaben 301, Stuttgart 1959, 167-179 - HuH¹ 942-950 - HuH² II 536-543.
- * *Kleiderdinge.* Zur Analyse der Odyssee. Hermes 87 (Hermes Klingnerianus), 1959, 13-26 - HuH² I 79-93.
Hans Joachim Krämer, Arete bei Platon und Aristoteles. Zum Wesen und zur Geschichte der platonischen Ontologie. Abhandlungen der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, 1959, 6. Abh., Heidelberg 1959, 600 S. Vorgelegt am 9. Juli 1958 von Wolfgang Schadewaldt.
Legende von Homer dem fahrenden Sänger. Übertragen und erläutert von Wolfgang Schadewaldt. Lebendige Antike. Zürich-Stuttgart 1959, 80 S. (Neuausgabe, erstmals 1942).
- * *Neue Kriterien zur Odyssee-Analyse.* Die Wiedererkennung des Odysseus und der Penelope. Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, 1959, 2. Abh., 28 S. Wilhelm Szilasi zum siebzigsten Geburtstag am 19. Januar 1959 dargebracht - ²1966 - HuH² I 58-77.
- * *Pindars Zehnte Nemeische Ode.* In: Martin Heidegger zum siebzigsten Geburtstag. 26. September 1959, Pfullingen 1959, 252-263 - HuH¹ 85-94 - HuH² I 172-181.
- * *Professor Hommel 60 Jahre alt.* Schwäbisches Tagblatt, 15. Jahrgang, Nr.112, 19. Mai 1959 - HuH² II 695f.
Schillers Griechentum. In: Schiller. Reden im Gedenkjahr 1959. Im Auftrag der Deutschen Schiller-Gesellschaft hrsg. von Bernhard Zeller. Veröffentlichungen der Deutschen Schiller-Gesellschaft 24, Stuttgart 1959, 258-270 - Neufassung 1960.
- 1960 * *Anacreonteum Latine versum.* Übersetzung eines Anacreonteum (23 Bergk) ins Lateinische; Lösung einer im Juli 1921 im Berliner Proseminar von Eduard Fraenkel gestellten Aufgabe. In: HuH¹ 520 - Viva Camena. Latina huius aetatis carmina collecta et edita ab Iosepho Eberle, in aedibus Artemidos Turici et Stuttgartariae MCMLXI, p.129 - HuH² I 797.
- * *Antrittsrede, gehalten im Sommer 1943 in der Preußischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin* (Jahrbuch der Preußischen Akademie der Wissenschaften 1943, 172-174; ungedruckt). In: HuH¹ 1038-1040 - HuH² II 782-784.
- * *Antrittsrede, gehalten im Sommer 1958 in der Heidelberger Akademie der Wissenschaften.* In: Jahreshefte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften 1958/-59, Heidelberg 1960, 3-5 - HuH¹ 1040-1043 - HuH² II 784-787.
- * *Die Begriffe «Natur» und «Technik» bei den Griechen.* Zwei Rundfunkvorträge zum Selbstverständnis der Technik in unserer Zeit, gehalten am 25.Juni und 10.Juli 1959 im Norddeutschen Rundfunk Hannover. In: Natur-Technik-Kunst. Drei Beiträge zum Selbstverständnis der Technik in unserer Zeit, Göttingen-Berlin-Frankfurt am Main 1960, 35-53 - HuH¹ 907-919 - HuH² II 512-524.
Daten zu den «Sieben gegen Theben» des Aischylos. In: Programmheft des Landestheaters Württemberg-Hohenzollern 1959/60, 16. Folge, S. 122-124.
- * *Der Eid des Hippokrates,* griechisch und deutsch gesprochen von Wolfgang Schadewaldt. Deutsche Grammophon Gesellschaft 1960-HuH² I 655f.(Übersetzung).
- * *Einleitung zur «Antigone» des Sophokles von Hölderlin in der Vertonung von Carl Orff.* Drei Sendungen des Bayerischen Rundfunks im April 1959. In: HuH¹ 247-277 - HuH² I 434-465.
- * *Die Empedokles- Tragödie Hölderlins.* Vortrag, gehalten bei einer Morgenfeier im

- Staatstheater Stuttgart als Einführung zur Neueinstudierung der Tragödie am 18. November 1956. In: Hölderlin-Jahrbuch 11, 1958/60, Tübingen 1960, 40-54 - HuH¹ 753-766 - Auszug: Blätter des Deutschen Theaters in Göttingen, Spielzeit 1965/66, 16. Jahr, Heft 266, S. 134-137 - Antike und Gegenwart, 1966, 97-112 - HuH² II 261-275.
- Faints Ende und die «Achilleis».* In: Weltbewohner und Weimaraner. Ernst Beutler zugeordnet, hrsg. von B. Reifenberg und E. Staiger, Zürich 1960, 243-260 - Goethestudien, 1963, 283-300.
- * *Zu Werner Heisenbergs Darstellung der Entwicklung der modernen Atomphysik.* Beitrag zu einem Rundfunkgespräch. Sendung des Bayerischen Rundfunks am 22. Mai 1958. In: Natur-Technik-Kunst. Drei Beiträge zum Selbstverständnis der Technik in unserer Zeit, Göttingen-Berlin-Frankfurt am Main 1960, 57-65 - HuH² II 525-527.
- * *Der Helioszorn in der Odyssee.* In: Studi in onore di Luigi Castiglioni, Florenz 1960, (II) 861-876 - HuH² I 93-104.
- Hellas und Hesperien.* Gesammelte Schriften zur Antike und zur neueren Literatur. Zum sechzigsten Geburtstag von Wolfgang Schadewaldt am 15. März 1960 unter Mitarbeit von Klaus Bartels hrsg. von Ernst Zinn. Zürich-Stuttgart 1960, 1072 S., 6 Tafeln - Neuausgabe 1970.
- Der «König Ödipus» des Sophokles.* Daten zur Erläuterung der Tragödie. In: Programmheft. Städtische Bühnen Bielefeld. Stadttheater. 1959/60, 12. Folge.
- Mein Gedicht. Hölderlin, Der Spaziergang.* Die Zeit, 15. Jahrgang, Nr. 21, 20. Mai 1960, S. 6.
- Von der Mündlichkeit des Worts.* Stuttgarter Zeitung, 16. Jahrgang, Nr. 167, 23. Juli 1960, S. 49 - Neufassung 1968.
- Natur - Technik - Kunst.* Drei Beiträge zum Selbstverständnis der Technik in unserer Zeit. Göttingen-Berlin-Frankfurt am Main 1960, 64 S.
- * *Shakespeare und die griechische Tragödie.* Sophokles' «Elektra» und «Hamlet». Vortrag, gehalten auf der Jahresversammlung der Deutschen Shakespeare-Gesellschaft zu Bochum am 26. April 1955. In: Jahrbuch der Deutschen Shakespeare-Gesellschaft 96, 1960, Heidelberg 1960, 7-34 - HuH¹ 578-599 - HuH² II 7-27.
- * *Die Situation der Klassischen Philologie heute.* Vortrag, gehalten im Südfunk Stuttgart am 19. Dezember 1957 in der Sendereihe «Die Situation der Wissenschaften heute». In: HuH¹ 973-981 - HuH² II 589-598.
- Zur Uraufführung des «Oedipus, der Tyrann» nach Hölderlin von Carl Orff.* Einführung zur gleichzeitigen Übertragung der Uraufführung im Südfunk Stuttgart am 12. Dezember 1959. In: HuH¹ 866 f. - Antike und Gegenwart, 1966, 177f.
- Der Wandel des Griechenlandbildes in den letzten fünfzig Jahren.* In: Begegnung mit Griechenland. Aus dem Programm der Griechischen Woche. Radio Bremen. Bremer Beiträge I, Bremen 1960, 38-53 - Neufassung 1966.
- * *Der Weg Schillers zu den Griechen.* In: Die Gegenwart der Griechen im neueren Denken. Festschrift für Hans-Georg Gadamer zum 60. Geburtstag, hrsg. von D. Henrich, W. Schulz, K.-H. Volkmann-Schluck, Tübingen 1960, 225-232 - Jahrbuch der Deutschen Schiller-Gesellschaft 4, 1960, Stuttgart 1960, 90-97 - HuH¹ 825-831 - HuH² II 127-133.
- * *Das Werk Carl Orffs und sein neues Osterspiel.* Ein Rundfunkvortrag. In: HuH¹ 862-865 - HuH² II 420-423 (Zusammenfassung aus: Zum Osterspiel von Carl Orff, 1956, und: Das Werk Carl Orffs und sein neues Osterspiel. Sendung des Süddeutschen Rundfunks am 8. April 1956; ungedruckt).
- * *Das Wort der Dichtung.* Mythos und Logos. Vortrag, gehalten anlässlich der Vortragsreihe Wort und Wirklichkeit, veranstaltet von der Bayerischen Akademie der Schönen Künste vom 11. bis 15. Juli 1960 in der Aula der Universität München. In: Wort und Wirklichkeit. Sechste Folge des Jahrbuchs Gestalt und Gedanke, München 1960, 90-128 - Auszug: Süddeutsche Zeitung, Nr. 170, 16./17. Juli 1960 - Norwegische Übersetzung 1961 - Goethestudien, 1963, 405-432 - Sprache und Wirklichkeit. Essays.

- Deutscher Taschenbuch Verlag 432, München 1967, 91-121 - HuH² I 750-772.
- 1961 *Diktningens ord. Mythos og Logos.* In: Litteraturforståelse. Diktning og Kritik, Oslo 1961, 169-190 (Das Wort der Dichtung, 1960).
- * *Epigramma invectivum, pluteo auditorii inscriptum.* In: Viva Camena. Latina huius aetatis carmina collecta et edita ab Iosepho Eberle, in aedibus Artemidos Turici et Stuttgartardiae MCMLXI, p. 129 (Collegium philosophicum) - HuH² II 823.
- * *Die erste Begegnung des Odysseus und der Penelope.* Odyssee 18, 158 ff. Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Jahreshft 1960/61, 3-5 - HuH² I 77f.
- Des Geistes Wirksamkeit.* Zum Tode von Werner Jaeger. Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 256, 3. November 1961, S. 28.
- Goethe, Plutarch und Sophokles.* Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 35, 1961, 64-68 - Goethestudien, 1963, 159-163.
- Lob Berlins.* In: Berlin in Vergangenheit und Gegenwart. Tübinger Vorträge, hrsg. von H. Rothfels, Tübingen 1961, 75-92 - Neufassung 1963.
- Das Reh.* In: Dauer im Wandel. Festschrift zum 70. Geburtstag von Carl J. Burckhardt, hrsg. von H. Rinn und M. Rychner, München 1961, 375-380 - Schlesien. Eine Vierteljahrsschrift für Kunst, Wissenschaft und Volkstum 10, 1965, 222-225 - Neufassung 1968.
- * *Die Wappnung des Eteokles.* Zu Aischylos' «Sieben gegen Theben». In: Eranion. Festschrift für Hildebrecht Hommel, dargebracht von seinen Tübinger Freunden und Kollegen. Unter Mitwirkung von E. Zinn hrsg. von J. Kroymann, Tübingen 1961, 105-116 - HuH² I 357-367.
- 1962 *Gedenkrede auf Werner Jaeger.* 30. Juli 1888 - 19. Oktober 1961. Gehalten an der Freien Universität Berlin am 12. Juli 1962. Schweizer Monatshefte 42, 1962, 755-769 - Selbständige Ausgabe 1963 (HuH² II 707-722).
- * *Gerhart Hauptmann und die Griechen.* Zum «Bogen des Odysseus». In: Jahrhundertfeier für Gerhart Hauptmann, 15.-21. November 1962, Köln 1962, 25-28 - HuH² II 406-410.
- Humanität und Technik.* Vortrag, gehalten auf dem Deutschen Ingenieurtag am 25. Mai 1962 in Karlsruhe. In: VDI - Zeitschrift 104, 1962, 1327-1331 - Englische Übersetzung 1963 - Technik und Humanität sind einander zugeordnet, Berichte und Informationen des Österreichischen Forschungsinstituts für Wirtschaft und Politik 19, 1964, 15f. - Spanische Übersetzung 1966.
- Beiträge in: Pindar, Siegeslieder.* Deutsche Übertragungen, zusammengestellt von U. Hölscher. Mit einem Nachwort von B. Snell. Fischer Bücherei, Exempla Classica 52, Frankfurt am Main-Hamburg 1962. (Der Band enthält neben Nem. 10 [1959] folgende neu übersetzte Oden: Ol. 7, 11, 13; Pyth. 12; Nem. 1, 2, 6, 7, 11.)
- * *Das Religiös-Humane als Grundlage der geschichtlichen Objektivität bei Herodot.* In: Geschichte und Gegenwartsbewußtsein. Festschrift für Hans Rothfels zum 70. Geburtstag, hrsg. von W. Besson und F. Frhr. Hiller von Gaertringen, Göttingen 1962, 217-229 - Herodot. Eine Auswahl aus der neueren Forschung. Wege der Forschung 26, hrsg. von W. Marg, Darmstadt (gleichzeitig München) 1962, 185-201. ²1965 - HuH² I 580-593.
- * *Richard Wagner und die Griechen.* Erster Teil. In: Lohengrin-Programmheft der Bayreuther Festspiele 1962, 2-32. - Richard Wagner und das neue Bayreuth, hrsg. von Wieland Wagner. List Bücher 237, München 1962, 149-174 - HuH² II 343-365 - Die in den Jahren. 1962-1964 anlässlich der Bayreuther Festspiele gehaltenen drei Vorträge wurden auf Einladung Herbert von Karajans in den Jahren 1967, 1968 und 1969 anlässlich der Osterfestspiele in Salzburg wiederholt. Für die Aufnahme in «Hellas und Hesperien» neu eingeleitet, sind sie dem Andenken Wieland Wagners gewidmet.
- 1963 *Das Problem der Übersetzung antiker Dichtung.* Referat und Schlußwort. In: Artemis Symposium, Zürich-Stuttgart 1963, 22-41 und 51-55 (Nicht im Handel).
- Zu den Begriffen Augenblick · Moment · Stunde.* In: Goethestudien, 1963, 433-446.

- * *Berlin und die Berliner*. In: Berliner Geist. Fünf Vorträge der Bayerischen Akademie der Schönen Künste, Berlin 1963, 11-49 - HuH² II 787-808 - (Neufassung des Vortrags von 1961).
 - * *Gedenkrede auf Werner Jaeger*. 1888-1961. Mit einem Verzeichnis der Schriften Werner Jaegers. Berlin 1963, 39 S. - HuH² II 707-722.
Goethes «Achilleis». Rekonstruktion der Dichtung. In: Goethestudien, 1963, 301-395.
Goethestudien. Natur und Altertum. Zürich-Stuttgart 1963, 531 S. Eduard Spranger zum achtzigsten Geburtstag am 27. Juni 1962 in Verehrung und Dankbarkeit dargebracht.
Der Gott von Delphi und die Humanitätsidee. Vortrag, gehalten anlässlich der Entgegennahme des Reuchlin-Preises der Stadt Pforzheim zu Pforzheim am 16. November 1963. Selbstverlag der Stadt Pforzheim 1963, 28 S. (Nicht im Handel) - Gekürzt: Stuttgarter Zeitung, 20. Jahrgang, Nr. 145, 27. Juni 1964 -Überarbeitung 1965 - Griechische Übersetzung 1965 - Neuausgabe 1965.
Graeske Stjernesagn, på Dansk ved Otto Foss. Kopenhagen 1963, 172 S. (Griechische Sternsagen, 1956).
Beiträge in: Griechische Lyrik. Von den Anfängen bis zu Pindar. Griechisch und deutsch, hrsg. von G. Wirth. Rowohlts Klassiker 140/142, Hamburg 1963 (Drei Übertragungen aus: Sappho - Welt und Dichtung, 1950).
Griechische Sternsagen, erläutert von Yoshima Sugiyama, Tokio 1963, 57 S. (Abschnitt 2 und 4 der deutschen Ausgabe von 1956 mit japanischen Erläuterungen).
Griechische Sternsagen (1956). In das Japanische übersetzt von T. Kawahara, Tokio 1963, 230 S.
Beiträge in: Liebesdichtung der Griechen und Römer. Zweisprachig, ausgewählt und zum Teil neu übertragen von H. Gasse. Sammlung Dieterich 141, Leipzig 1963 (Sieben Übertragungen aus: Sappho - Welt und Dichtung, 1950).
 - * *Menander. Das Schiedsgericht - Der Menschenfeind*. Mit einem Nachwort von Wolfgang Schadewaldt. Fischer Bücherei, Exempla Classica 72, Frankfurt-Hamburg 1963 (Darin: Das Schiedsgericht. Für die Bühne übersetzt und ergänzt von Wolfgang Schadewaldt/Der Menschenfeind. Deutsche Bühnenbearbeitung von Otto Vicenzi)-Das Nachwort, S. 136-150, auch in: HuH² I 549-558.
Der Mensch in der technischen Welt. Festvortrag anlässlich des 30. Fortbildungskurses für Ärzte in Regensburg am 23. Mai 1963, o.J. (1963), 3-22 (Nicht im Handel) - Bayerisches Ärzteblatt 18, 1963, 749-756 - Universitas 19, 1964, 449-467.
Sophokles, Die Tragödien. Mit einem Nachwort von Wolfgang Schadewaldt. Fischer Bücherei, Exempla Classica 81, Frankfurt am Main - Hamburg 1963 (Darin: Übersetzung des «König Ödipus» und der «Elektra»; weitere Übersetzungen von E. Buschor, K. Reinhardt, E. Staiger) - Das Nachwort, S. 375-390, wiederholt in der Sophokles-Ausgabe von 1968.
Technology and Man. In: German Opinion on Problems of Today, ed. by W. Leifer. 2, 1963 «Man and Technology», München 1963, 51-59 (Humanität und Technik, 1962).
Übersetzung als geistige Aufgabe. Vortrag, gehalten am 23. Oktober 1958. In: Theater im Gespräch. Ein Forum der Dramaturgie. Aus den Tagungen 1953-1960 der Deutschen Dramaturgischen Gesellschaft ausgewählt und hrsg. von F. Schultze, München-Wien 1963, 325-339.
 - * *Richard Wagner und die Griechen*. Zweiter Teil. Die Ringdichtung und Aischylos' «Prometheus». In: Meistersinger-Programmheft der Bayreuther Festspiele 1963, 24-44 - HuH² II 365-386.
- 1964 *Beitrag in: Abschied von der Antike?* Eine Enquête über die Rolle des griechisch-lateinischen Geisteserbes in der Bildungsgesellschaft von morgen. Wort und Wahrheit 19, 1964, 128f.
Beiträge in: Griechische Lyrik in deutschen Übertragungen. Eine Auswahl mit

- Anmerkungen und Nachwort von W. Marg. Reclams Universal-Bibliothek 1921/1923, Stuttgart 1964 (Drei Übertragungen, nach verschiedenen Vorlagen).
- * *Griechisches Theater*. Deutsch von Wolfgang Schadewaldt. Frankfurt am Main 1964, 535 S. In memoriam Peter Suhrkamp (Aischylos: Die Perser, Die Sieben gegen Theben. Sophokles: Antigone, König Ödipus, Elektra. Aristophanes: Die Vögel, Lysistrata. Menander: Das Schiedsgericht) - Daten zu Aischylos' «Persern», S. 503-505, auch in: Programmheft des Landestheaters Württemberg-Hohenzollern 1965/66, 11. Folge; HuH² I 354-357 - Daten zu Aristophanes' «Vögeln» auch in: HuH² I 540-543.
- Einführung zu: Otto Rieth, Die Kunst Menanders in den «Adelphen» des Terenz*. Mit einem Nachwort hrsg. von Konrad Gaiser, Hildesheim 1964.
- * *Der Umfang des Begriffs der Literatur in der Antike*. Vortrag, gehalten am 19. Oktober 1963 anlässlich der Herbsttagung in Darmstadt. In: Jahrbuch der Deutschen Akademie für Sprache und Dichtung Darmstadt 1963, Heidelberg-Darmstadt 1964, 98-115 - Auszug: Stuttgarter Zeitung, 20. Jahrgang, Nr. 62, 14. März 1964 - HuH² I 782-796.
- * *Richard Wagner und die Griechen*. Dritter Teil: Nachlese. In: Meistersinger-Programmheft der Bayreuther Festspiele 1964, 3-30 - HuH² II 386-405.
- 1965 * *Gedenkworte für Werner Jaeger*. In: Orden Pour le Mérite für Wissenschaften und Künste. Reden und Gedenkworte 6, 1963/64, Heidelberg 1965, 31-43 - HuH² II 722-730.
- * *Gedenkworte für Eduard Spranger*. In: Orden Pour le Mérite für Wissenschaften und Künste. Reden und Gedenkworte 6, 1963/64, Heidelberg 1965, 121-131 - HuH² II 730-736.
- Der Gott von Delphi und die Humanitätsidee*. Vortrag, gehalten am 14. Mai 1964 in Athen. In: Wissenschaftliches Jahrbuch der Philosophischen Fakultät der Universität Athen (EEAth.) 15, 1964/65, Athen 1965, 59-75 - Auch selbständig, mit griechischer Zusammenfassung, in: Schriftenreihe der Griechischen Humanistischen Gesellschaft, 1. Reihe, Heft 26, Athen 1965, 23 S. (Neufassung des Vortrags von 1963).
- Der Gott von Delphi und die Humanitätsidee*. Vortrag, gehalten am 14. Mai 1964 in Athen. Griechische Übersetzung und Anmerkungen von Konstantin J. Merentitos. Athen 1965, 38 S.
- * *Der Gott von Delphi und die Humanitätsidee*. Vortrag, gehalten anlässlich der Entgegennahme des Reuchlin-Preises der Stadt Pforzheim am 16. November 1963. Opuscula aus Wissenschaft und Dichtung 23, Pfullingen 1965, 31 S. (Neuausgabe in der überarbeiteten Fassung von 1964) - HuH² I 669-685.
- Von Homers Welt und Werk*. Aufsätze und Auslegungen zur homerischen Frage (³1959). 4., verb. Aufl. Stuttgart 1965.
- Synusia*. Festgabe für Wolfgang Schadewaldt zum 15. März 1965. Im Namen seiner Tübinger Schüler hrsg. von Hellmut Flashar und Konrad Gaiser. Pfullingen 1965, 465 S.
- Técnica y cultura desde la antiqua Grecia*. Revista de Occidente 3, 1965, 1-19 (Die Welt der modernen Technik ... 1965).
- * *Die Übersetzung im Zeitalter der Kommunikation*. Festansprache anlässlich der Eröffnung der Frankfurter Buchmesse 1965. Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel 21, 1965, 2267-2270 - Der Übersetzer. Diskussionsbeiträge und Informationen 2, 1965, Nr. 12, 7. Dezember 1965, S. 1-3 - Staatsanzeiger für Baden-Württemberg, Nr. 100, 18. Dezember 1965, S. 5 - Nachrichten für Dokumentation 17, 1966, 1-5 - Integritas. Geistige Wandlung und menschliche Wirklichkeit, hrsg. von D. Stolte und R. Wisser. Karl Holzamer gewidmet. Tübingen 1966, 550-559 - HuH² II 680-688.
- * *Die Welt der modernen Technik und die altgriechische Kulturidee*. Hellenika. Blätter der Vereinigung der Deutsch-Griechischen Gesellschaften 1965, Heft I, 14-21 - Spanische Übersetzung 1965 - Schweizer Monatshefte 47, 1967, 969-983 - Französische Übersetzung 1967 - HuH² II 485-497.
- 1966 *Antike und Gegenwart*. Über die Tragödie. Deutscher Taschenbuch Verlag 342, München 1966, 178 S. (Acht Aufsätze, ausgewählt aus HuH¹).

- Der Aufbau des Pindarischen Epinikion* (1928). 2., unv. Aufl. Tübingen 1966 - Lizenzausgabe: Darmstadt ²1966.
- * *Einführung zu: Zeitalter der Menschheit. Eine Weltkulturgeschichte. Klassisches Griechenland*, von Cecil M. Bowra und der Redaktion der Time-Life-Bücher, Time-Life International (Nederland) N. V. Deutsche Ausgabe 1966, 7 - HuH² II 447f.
- * *Experimentelle Philologie*. In: Donum natalicium, Albin Lesky zum 7. Juli 1966 dargebracht von Freunden und Schülern. Wiener Studien 79, 1966, 66-80 - HuH² I 483-496.
- Goethe-Wörterbuch*. Herausgegeben von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen und der Heidelberger Akademie der Wissenschaften. Wissenschaftliche Leitung Werner Hartke (ab Lieferung 2), Wolfgang Schadewaldt, Werner Simon und Wilhelm Wißmann (bis Lieferung 2). Erster Band. 1. Lieferung. A-abrufen. Stuttgart-Berlin-Köln-Mainz 1966, 128 Sp. Einführung, Sp. III-XVI, von Wolfgang Schadewaldt.
2. Lieferung. Abrufung - Ackerwand, a.O. 1967, Sp. 129-256.
3. Lieferung. Ackerwerk - Allgemeinheit, a.O. 1968, Sp. 257-384.
4. Lieferung. allgemeinmenschlich - Anekdote, a.O. 1969, Sp. 385-512.
5. Lieferung. Anekdotenjagd Anordnung, a.O. 1970, Sp. 513-640.
- * *Homer, Die Odyssee*. Deutsch von Wolfgang Schadewaldt. Bibliothek der Alien Welt. Zürich-Stuttgart 1966, 448 S. Werner Jaeger zum siebzigsten Geburtstag am 30. Juli 1958 (Überarbeitete Neuausgabe der Fassung von 1958) - Das «Verzeichnis der dem Dichter B angehörenden Partien der Odyssee» auch in: HuH² I 105.
- Humanidad y técnica*. Folia Humanistica 4, 1966, 455-465 (Humanität und Technik, 1962).
- Iliasstudien* (²1943). 3., unv. Aufl. Darmstadt 1966.
- * *Lebensgang*. In: Forscher und Gelehrte, hrsg. von W. Ernst Böhm in Zusammenarbeit mit G. Paehlke, Stuttgart 1966, 101f. - Überarbeitet: HuH² II 780f.
- Monolog und Selbstgespräch*. Untersuchungen zur Formgeschichte der griechischen Tragödie (1926). 2., unv. Aufl., Berlin-Zürich-Dublin 1966.
- Neue Kriterien zur Odyssee-Analyse*. Die Wiedererkennung des Odysseus und der Penelope (1959). 2., unv. Aufl., Heidelberg 1966.
- Der Tod des Empedokles*. Zur gegenwärtigen Bühnen-Einrichtung. In: Blätter des Deutschen Theaters in Göttingen. Spielzeit 1965/66, 16. Jahr, Heft 266, S. 137-140.
- Die Vergewärtigung des antiken Dramas auf der heutigen Bühne*. In: Theaterblätter. Bühnen der Landeshauptstadt Kiel. Spielzeit 1965-1966. Die Vögel, S. 265-267.
- * *Wandel des Griechenbildes*. Hellenika. Zeitschrift für deutsch-griechische kulturelle und wirtschaftliche Zusammenarbeit, 1966, Heft 3, 9-16. - Texte zur Antike, hrsg. von O. Leggewie, H. Lenzen, J. R. Zinken. Herder-Bücherei 290, Freiburg-Basel-Wien 1967, 191-202 - HuH² II 448-460 (Neufassung des Rundfunkvortrags von 1960).
- * *Aus der Werkstatt meines Übersetzens*. Dargetan an der Anrufung des Eros in Sophokles' «Antigone». Schweizer Monatshefte 46, 1966, 851-859 - HuH² II 671-680.
- * *Zwei Pindar-Oden*. In: Jahresring 66/67, Stuttgart 1966, 241-254 - HuH² I 162-172 (Pyth. 1 und 3).
- 1967 * *Einblick in die Werkstatt meiner Arbeit*. Für Dino Larese. In: Dino Larese, Wolfgang Schadewaldt. Eine Lebensskizze. Amriswiler Bücherei, Amriswil 1967, 22-40 - HuH² II 598-606.
- * *Gedenkworte für Thomas Stearns Eliot*. In: Orden Pour le Mérite für Wissenschaften und Künste. Reden und Gedenkworte 7, 1965/66, Heidelberg 1967, 45-54 - HuH² II 411-417.
- Le monde de la technique moderne et l'idée de culture dans la philosophie de la Grèce antique*. In: The Living Heritage of Greek Antiquity - L'Héritage vivant de l'Antiquité grecque, Paris 1967, 39-55 (Die Welt der modernen Technik ... 1965).

- Sophokles - Ferment unserer Bühne.* Siegfried Melchinger über griechische Tragödie und moderne Theaterpraxis. Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 88, 15. April 1967 (Besprechung: S. Melchinger, Sophokles. Friedrichs Dramatiker des Welttheaters 12, Hannover 1966).
- Richard Wagner und die Griechen.* Theater heute, 1967, Heft 10, 2-4.
- * *Erwin Wolff* †. Gnomon 39, 1967, 319f. - HuH² II 747-749.
- * *Zwei Oden Pindars auf Theron von Akragas, Sieger zu Olympia mit dem Viergespann.* In: Soldatentum und Kultur. Festschrift zum siebzigsten Geburtstag von Hans Speidel, hrsg. von M. Horst, Berlin 1967, 91-10² - HuH² I 153-161 (Ol. 3 und 2; Fr. 129, 131a, 130, 131b, 133 Snell).
- 1968 *Brünnhilde und Prometheus.* Zu Richard Wagners «Walküre». In: Programmheft. Osterfestspiele Salzburg 1968, S. 63-66.
- Idee und Zahl.* Studien zur platonischen Philosophie von H.-G. Gadamer, K. Gaiser, H. Gundert, H. J. Krämer, H. Kuhn. Vorgelegt von Hans-Georg Gadamer und Wolfgang Schadewaldt. Abhandlungen der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse, 1968, 2. Abh., Heidelberg 1968, 173 S.
- * *Von der Mündlichkeit des Wortes.* In: Sprache und Politik. Festgabe für Dolf Sternberger zum sechzigsten Geburtstag, hrsg. von C.-J. Friedrich und B. Reifenberg, Heidelberg 1968, 68-77 - HuH² I 772-781.
- * *Carl Orff und die griechische Tragödie.* «Antigone» «Ödipus» «Prometheus». In: Prometheus. Mythos-Drama-Musik. Beiträge zu Carl Orffs Musikdrama nach Aischylos, hrsg. von F. Willnauer, Tübingen 1968, 27-42 - HuH² II 423-435.
- * *Das Reh.* In: Jahresring 68/69, Stuttgart 1968, 160-165 - HuH² II 809-813 (Überarbeitete Fassung, erstmals 1961).
- * *Bernhard Schweitzer* †. 3.10. 1892 - 12. 7. 1966. In: Jahrbuch der Heidelberger Akademie der Wissenschaften 1966/67, Heidelberg 1968, 100-104 - HuH² II 743-747.
- * *Sophokles, Tragödien.* Hrsg. und mit einem Nachwort versehen von Wolfgang Schadewaldt. Bibliothek der Alten Welt. Zürich-Stuttgart 1968, 458 S. (Der Band enthält «Aias», «Antigone», «König Ödipus», «Elektra» in der Übersetzung von W. Schadewaldt sowie «Trachinierinnen», «Philoktet», «Ödipus auf Kolonos» in der Übersetzung von Ernst Buschor) - Das Nachwort «Leben und Werk», S. 415-454, auch in: HuH² I 402-434.
- * *Winckelmann und Rilke.* Zwei Beschreibungen des Apollon. Opuscula aus Wissenschaft und Dichtung 33, Pfullingen 1968, 32 S., 8 Tafeln. Johann Joachim Winckelmann zur zweihundertfünfzigsten Wiederkehr seines Geburtstags am 9. Dezember 1967 - HuH² II 95-116.
- 1969 * *Antikes und Modernes in Schillers «Bram von Messina».* In: Jahrbuch der Deutschen Schiller-Gesellschaft 13, 1969, Stuttgart 1969, 286-307. - HuH² II 144-166.
- * *Der harte Kern des Epos.* Rheinische Post, 24. Jahrgang, Nr. 182, 9. August 1969 - Unter dem Titel «Zur Geschichtlichkeit des Troischen Krieges»: HuH² I 38-42.
- Sophokles, Elektra. Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Schadewaldt. Reclams Universal-Bibliothek 711, Stuttgart 1969, 80 S.
- 1970 * *Die Acharner des Aristophanes.* Daten zur Übersetzung und Bühnenbearbeitung. In: HuH² I 535-540.
- Das Altertum und jedes neue Gute.* Für Wolfgang Schadewaldt zum 15. März 1970, hrsg. von Konrad Gaiser. Stuttgart-Berlin-Köln-Mainz 1970, 560 S.
- * *Antikes Drama auf dem Theater heute.* Übersetzung Inszenierung. Pfullingen 1970, 48 S., 17 Abb. Martin Heidegger zum achtzigsten Geburtstag am 26. September 1969 dankbar für tätige Anteilnahme auch auf diesem Wege - HuH² II 650-671.
- Aristophanes, Die Vögel. Bühnenfassung. Übersetzung und Bearbeitung von Wolfgang Schadewaldt. Insel-Bücherei 946, Frankfurt am Main 1970, 112 S. Für Günther Fleckenstein in herzlicher Verbundenheit.

- * *Das Bild des griechischen Menschen*. Vortrag, gehalten im Bayerischen Rundfunk am 9. April 1968. In: Schweizer Monatshefte 49, 1969/70, 1079-1092 (Mit einem Grußwort der Redaktion, S. 1079) - HuH² I 657-669.
Das Bühnenwerk Carl Orffs. Grundzüge und Gruppierung. In: Carl Orff. Das Bühnenwerk. Mit einem Vorwort von Wolfgang Schadewaldt und einem chronologischen Werkverzeichnis. Katalog der Ausstellung anlässlich des fünfundsiebzigsten Geburtstags. 10. Juni-31. Juli 1970. Bayerische Staatsbibliothek München.
- * *Daten zu den «Fröschen» des Aristophanes*. In: HuH² I 546-549.
Griechische Sternsagen. Mit Zeichnungen von Celestino Piatti. Ungekürzte, neubearbeitete Ausgabe. Deutscher Taschenbuch Verlag 660, München 1970, 171 S. (Erste Ausgabe 1956).
- * *Lehren, Lernen, Erziehen, Bilden*. Vortrag, gehalten an der Universität Tübingen am 13. November 1953. In: HuH² II 566-581.
- * *Nachruf auf Kurt von Hart*. Nach dem Kallimachos. In: HuH² II 752.
- * *Novo Ennio meo*. Josef Eberle, dem Dichter in deutscher, schwäbischer und lateinischer Sprache zum fünfundsiebzigsten Geburtstag. 8. September 1966. In: HuH² II 697.
Carl Orff. Der Komponist - Der Dichter. In: Catulli Carmina - Carmina Burana. Programm. Bühnen der Stadt Köln, 1970.
- * *Die «Philologische Methode»*. Ein Apophthegma von Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff, niedergeschrieben für Wolfgang Schmid auf dessen Wunsch als Diskussionsbeitrag für eine Aussprache über die Philologische Interpretation. In: HuH² II 606f.
- * *Platon und Kratylus*. Ein Hinweis. Dem Andenken Philip Merlans gewidmet. In: HuH² I 626-632.
Wallenstein. Aus einem Brief an Hansgünther Heyme, geschrieben am 29. Januar 1970. In: Thema. Theater-Magazin. Bühnen der Stadt Köln, 1970, Heft 8, S. 8.
- * *Ein Wort des Gedenkens für Adolf Deißmann*. Zur Feier der Einweihung einer Gedenktafel am Geburtshaus Adolf Deißmanns in Langenscheid/Nassau am 24. Juni 1962. In: HuH² II 749-751.
- * *Wort und Sache im Denken Goethes*. In: Silvae. Festschrift für Ernst Zinn zum 60. Geburtstag, dargebracht von Kollegen, Schülern und Mitarbeitern. Hrsg. von M. v. Albrecht und E. Heck, Tübingen 1970, 199-209 - Schweizer Monatshefte 49, 1969/70, 926-934 - HuH² II 117-126.
Das Bild der Frau im frühen Griechentum. Vortrag, gehalten im Bayerischen Rundfunk am 24. Februar 1970. In: Festschrift des Lessing-Gymnasiums Frankfurt am Main 1970.
Das Bühnenwerk Carl Orffs. Vortrag, gehalten bei dem Festakt zum fünfundsiebzigsten Geburtstag Carl Orffs in der Bayerischen Staatsbibliothek zu München am 10. Juni 1970. In: Schöner Heimat, hrsg. vom Bayerischen Landesverein für Heimatpflege, 1970, Heft 3.
- * *Humanitas Romana*. Vortrag, gehalten in Dublin im Mai 1968. Joseph Vogt zum fünfundsiebzigsten Geburtstag am 23. Juni 1970. In: Aufstieg und Niedergang der römischen Welt. Geschichte und Kultur Roms im Spiegel der neueren Forschung, hrsg. von H. Temporini, I, Berlin 1970 - HuH² I 685-700.
Das Leben und die Dichtung Sapphos. In: Die Großen der Weltgeschichte, hrsg. von K. Faßmann u.a., Zürich-München.
Pindars Zehnte Pythische Ode, übersetzt und erläutert im besonderen Bezug auf Hölderlins späte Hymne «Die Wanderung». In: Festschrift für Friedrich Beißner zum 65. Geburtstag am 26. Dezember 1970.
Provokatorisches Inszenieren. In: Thema. Theater-Magazin. Bühnen der Stadt Köln, 1970.
Sonne, Mond und Sterne in Goethes Lyrik. In: Festschrift für Hermann Heimpel, 1970.
Urform und Entstehung der attischen Tragödie. In: Aischylos. Wege der Forschung 87, hrsg. von H. Hommel, Darmstadt.